

Title	尊経閣文庫蔵『慈巧上人極楽往生問答』翻刻・略解題
Sub Title	
Author	恋田, 知子(Koida, Tomoko)
Publisher	慶應義塾大学国文学研究室
Publication year	2002
Jtitle	三田國文 No.35 (2002. 3) ,p.43- 80
JaLC DOI	10.14991/002.20020300-0043
Abstract	
Notes	資料紹介
Genre	Departmental Bulletin Paper
URL	https://koara.lib.keio.ac.jp/xoonips/modules/xoonips/detail.php?koara_id=AN00296083-20020300-0043

慶應義塾大学学術情報リポジトリ(KOARA)に掲載されているコンテンツの著作権は、それぞれの著作者、学会または出版社/発行者に帰属し、その権利は著作権法によって保護されています。引用にあたっては、著作権法を遵守してご利用ください。

The copyrights of content available on the Keio Associated Repository of Academic resources (KOARA) belong to the respective authors, academic societies, or publishers/issuers, and these rights are protected by the Japanese Copyright Act. When quoting the content, please follow the Japanese copyright act.

尊經閣
文庫蔵 『慈巧上人極樂往生問答』 翻刻・略解題

恋田 知子

ここに紹介する尊經閣文庫蔵『慈巧上人極樂往生問答』は、永享元年（一二二九）の書写奥書を持つ、上下二冊からなる転写本である。詳しくは、稿を改めて論ずる予定であるが、以下におおよそ触れておく。

本書は、大和国の慈巧上人が廻国修行の途次、一夜八幡宮の一の神子（巫女）のもとに宿り、神子とその夫の翁と問答を行い、ついに念仏門に帰依せしむるという内容である。作者や成立年代は不詳であるが、遅くとも南北朝には成立していたと考えられる。伝本には、大分市専想寺、長野市康楽寺の真宗寺院に伝わる『慈巧聖人神子問答』（『真宗史料集成』第五巻所収）等が知られているが、いずれも本書の上冊部分に相当するものである。尊經閣文庫蔵本では、問答の相手を、上冊では神子、下冊では翁とに大別し、それぞれとの問答によって、現世後世にわたる称名念仏の功德を体系的に説くことから、一貫性をもったものとみなすことができ、当作品の本来的な姿、すなわち原態を示すものと考えられる。

また、神子との問答の際、念仏利益の例証として、おおよそ十二の説話を掲げているが、女人に関するものが目立つ上に、法

華経直談世界との共通話も見いだせる。しかも、叙述が詳細であり、全体としてより練れた説話に仕立てられている点では、お伽草子等の物語形成の原初段階を示唆するものとしても注目される。

以下、簡潔に書誌を記す。

- ・所蔵 前田育徳会尊經閣文庫 函架番号「一七・二三書」
- ・形態 二巻二冊、紙本墨書、袋綴
- ・寸法 縦二六・五糎、横二一・一糎
- ・表紙 縹色表紙
- ・外題 中央に「慈巧上人極樂往生問答上（下）」と墨書
- ・丁数 上巻 墨付三十七丁
下巻 墨付四十三丁、前遊紙一丁、後遊紙二丁
- ・行数 半葉十二行無罫 平仮名混じり文
- ・奥書 「本云／鳴瀧殿の御本にてうつしおはりぬ／此本は後崇光院御筆／永享元年十月七日」（下冊四三丁裏）

翻刻に当たり、底本に忠実を期し、見消や補入等は表記通りとした。また上冊における説話部分は改行した上で始めているが、これもそのままとした。但し、全体に本文は追い込みとし、

異体字は現行字体に改めた。虫食いによる判読不明文字は、□で表した。また、私に句読点を打ち、会話文には「、」を施した。誤字、誤写と判断される箇所には、右傍らに（ママ）を付した。

附記

閲覧、並びに翻刻掲載を御許可頂きました前田育徳会尊經閣文庫に厚く御礼申し上げます。

翻刻

慈巧上人極樂往生問答上（外題）

中比の事にやありけん、大和國宇多の郡に修行者ありけり。名をは慈巧といひけり。いかなる所より來れりともしらす。くるればふるき塔寺などに影をやとし、あくれば人里に出て命をつく。かくして、とし月をおくる程に、ある時山さとをすくろに日くれぬ。とまるへき堂舎などもなし。いかゝせむとこゝろほそき所に、あやしのいほり一ありけり。たちよりやとをかるに、内より年老たる女一人さしいてゝ、かなふましきよしをなさけなく申ければ、「日もすてに暮ぬ。行へき方もなし。いかゝせん」との給へは、「さやうの修行者はけからはしき事もあり。思ひもよらず」とはしたなけにおへとも又家もなし。日くれぬ。すへきかたなくて【一オ】軒の下にひれ居たり。此女いよくいかりておへとも、「さりとはいかゝせん。内へいらはこそあらめ。軒の下はかりをはゆるし給へかし。雪ふりつみてたちやすらふへき方もなし」とて、かゝまりふしたり。此女ちから及

はて内へ入ぬ。上人心すこくてなかめいたる所に此女いかゝ思けん、「雪も降、又さこそさむくおはすらむ。内へいらせ給へ」といへは、しかるへき佛の御たすけかなと思ひてうちへ入ぬ。さて夜うちふけて、上人おほすやう、今日の所作をとかくまき

れていまたせさりつるよと思ふか、た、しかやうの所には念仏など忌事のある物と思ひて心のうちに申いたるか、思ひわすれてすこしたかく念佛を申に、この女おとろきあひて申やう「此所には八幡宮おはします。一の神子にて候へはこそ【一ウ】かやうに物忌はすれ」といへは、僧云「抑神子にておはせんからに、念佛をおそれ給事はいかなる故ぞ」。女云様「念仏は人の死ぬるおり申ことなれば我身にもおそれ、又神は人のしぬるをいませ給へは我もいまふなり」といふ。僧の云様「さらはあるし殿、なかくとをく神子なし給そ」といへは、女あさけりていふやう「けふある事をの給御房かな。我神子をしいたしたる事は、おほろけの事にあらず。主人のましますか、宮仕せしとてこそとやう／＼に御勘當ありしかとも、御神のたゞり給によりて、力およはずして今は惣の一まてなりたる物を、御房の身にて神子なせそとのたまふ事こそ中／＼おこかましけれ」。僧云様「かく申事もそのゆへなきにあらず。念佛は人の死ぬる時申事【二オ】なれば、我はこれをおそる。又しぬることをは神のことにいませ給へは、我もいまふとの給へは、さらんには神子の神樂人のしぬる時するなれば、おなしくこれを神のまことににくみ給に、いかに人のしぬる時するを（ママ）はし給そ」といへは、女いふやう「さかさまに人につめられん事なの給そ。神子神樂する事は、いかなる人のしぬる時はかりする。神の御前にては御神

樂とてつかまつる。わたくしの家にもきよめともいひてするなり」といへば、僧云「神子殿も人にさかさまつまらんする事なの給そ。念仏もいつかはかならず人のしぬる時のみ申。佛の御前にても別時とて申す。わたくしの家にも自行とて申なり。あやまで死ぬる時にはわつかに十反廿反又百反千反には過す。【二ウ】日々の自行に申事も心もあり。かしこき人は無下にすくなき定一万二萬五万六万乃至十萬も申なり。これはいかに」といへば、神子のへやるかたなくて「されとも」とそつふやきける。爰に僧又いはく「神子殿におそれく物おしへ申さん。けふより後はいかなるいそぎの事ありとも、人の名よひ給へからず。まして子孫などの名よふ事ゆめくあるへからず」といへば、此おんな「御房は病ともみぬにたは事し給か。させる無言をしたらはや、人の名よはてあるへき」といへば、僧云様「たは事にあらず。これも御ための事なり。その故は人のしぬる時ある事を忌給へば、なにとしてやらん、人のしぬる時はかの人の名を耳にあてしきりによはふならひなれはいか、さしも大事に思はん子孫の名【三才】をは、いましくいまたしなぬさきにはよひ給はん。又なかく死ぬる事もましまさぬ佛の御名をよひたてまつるをたにもいましく思給は、いか決定としてしぬる人の名をよひ給はん」と申なり。女云「人の名をよふ事はたの時もよふめるは」といへば、僧云「念仏申事も又たの時も申めるは」といへば、又女つまりてしのひ聲に「されとも」とそ申たる。僧いはく「猶々おしへ申さむ。今日より後は水はしのみ給な。夜なれはとて帯ときてふし給へからず。道をもあゆみ坂はしのほり給はん時に、くるしくとも

いきたえ給へからず。いかに心にちかひ、腹立事ありとも、人をにらみたまふな」といへば、此女云「御房は物のつきたるか、おそろしや。人のもとに來て物くるはしく、なにとまなき事【三ウ】いひひたるは。水のまてはしねとや。又とし老ぬれば、しつかにみたるたにくるし。まして、さかのほん時いきつかさらんや。子孫のわろからん時はうちもにらみもせてはいかに」と申せば、僧いはく「これもまたく物くるはしくて申にあらず。ことのいはれを申なり。前にも申かごとく、死ぬる時の事をいまひ給へば、人のしぬる時は、これか水かれか水とて、しきりに水をのますれば、そのまねなし給そと申なり。又人の帯とててふしたる姿、いつくかは死人にかはれる。又しぬる人はもての外に人の目を大にみなしたるにたかはす。一々にそのまねなし給そと申なり。思は還迹し給へし。なかくしぬる事もましまさぬ。佛の御名を唱るたにもいまひ給は、いか、現在にしぬる人のふるまひ【四才】をまなひ給はんと思て、御ための事をこそ申せ」といふ。女いはく「わ御房のやうなるいたつら事の後事いふも心えたるそ。かやうにといひ、かくいひせん程に、夜もあけなんすと思ひて、わくにかまへてあかさんとすると心えたり。それにはよるまし。その儀ならば女の身なりとも行てつき出さんするなり。恥みぬさきに出給へ」といへば、僧云「はちみせ給はすとも、いてよと候は、まかりいつへし。出るともたはいて候まし。神殿にまします御正躰を申うけてまかり候へし」といへば、この神子大にいかて云様「さては御房はぬす人にこそあるなれ。人のもとにやとりて、ちんをこそかゝらめ。返りて我としころ仰たてまつる神の御正躰を

とらんとすらむ」との、しれは、僧いはく「かくしてとら【四ウ】はこそぬす人にても侍らめ。事のいはれを申てこそ給はらめ。そのいはれと申すは、腹たてゝき給へ。神の御正躰と申は、これまさしき仏にてまします。就中に夜部この御正躰をおかみたてまつりしかは、阿弥陀佛にておはしますなり。しかるに、かのあみた仏の御名をとなふるたにおそれおち給はゝ、いかゝまさしき御姿をあらはしたてまつりたるをは、いはひおきたてまつり給はん事、これも御ためのごをこそ申せ。はらたち給ふな」といへは、爰にこの女すこしけしきへりたるやうにて、しはらくうち案して云「いさこの御正躰とはし比いはひおきたてまつりたれとも阿弥陀佛ともしらす。又念佛はこの仏の御名を唱るともしらす。しかれば御房は物しりにておはせば、くわしく【五オ】その次第をあかしてきかせさせたまへ」といへは、此僧すこし心ちよく思ひて云様「いゝたらてかやうにこそ仰られめ。こゝろをしつめてき給へ。抑神と申はみな源はこれ仏也。しかるを、衆生根性不同にして仏法をしんする事一唯ならず。これによりてしはらく神とあらはれて、やうやく佛道へこしらへ入れんとし給なり。しかるあひた、賞罰嚴重にして一念の信をおこさしめ、隠顯隨宜にして再拜の縁をむすはしむ。それにとりて神に二類まします。一には實者神、二には権者の神なり。はしめに實者の神と申すは、邪心執着の所現なり。次に権者の神と申すは、和光利物の儀式なり。又實者の神の本地を尋ぬれば、性徳法身の如來是也。権者の根源をきけ【五ウ】は、修徳應化の諸佛これなり。これにて、諸社の寶前には、鸞鏡金銅の佛像を安して當社正躰と号す。諸佛の靈地には、錦

帳玉欄の神社をいはひて當寺の鎮守と稱す。爰に知ぬ、諸仏諸神と化導しはらくことなりといへとも、本地と垂跡と利生遂に一なりといふ事を。しかるを汝佛をそむきて神を執するは、影に居て枝を折かことし。本地をわすれて垂跡をあをくは、水をはなれて水をもとむるに似たり。諸神事をみれば、たいしはこれみな佛事なり。ゆへ如何となれば、抑節^{不審}と梵音錫杖の法業をさきとし、時々^{不審}の懃行には論義決釋の講演を宗とせり。不動斷の懃法は諸寺のさほうにかはらず。毎年夏中の【六オ】安こは諸堂の法則にひとつなり。或は拜殿の内外には、上下の諸人惣持神咒の法施を致し、あるひは寶殿の前後には、貴賤の道俗等般若法花の法業を演たり。其中になんそ念佛三昧の法業にかきりて、諸神これをうけ給はさらんや。しかれば護神咒經の文をみるに、卅六部の神王万億恒沙の鬼神を眷屬として、念佛の人をまほるととき給。又般舟三昧經には、念仏の人冥衆諸護持を蒙ることをとくといふ。鬼神乾ともにもまもるへし。諸天人民又かくのことしといへり。この旨如來の直説也。なんのうたかひかあらん。中比、澄憲の八幡に參籠せられたる夢に、大菩薩しめしていはく「我昔出家名法藏、得成報身住淨土、我來娑婆世界中、即為護念々佛人」と。又この文の心は【六ウ】我むかし出家して、その名をほうさう比丘と名付き、すてに佛になりて極樂世界に住せり、いまこの娑婆世界にきたる事は、すなはち念佛の人をまほらんかためなりといふ心なり。しかれば、汝か仰奉る所の神はすてに念佛の人をまほらんとちかはせ給、神にはくゝまれたてまつる所の汝は又念仏の物をにくむ。すてに神と侍者とその本意あひそむき、又あるしとやとり人とその意趣

おなしからず。またある女房、十禪師に參て通夜してしのひに念佛を申ければ、まところみたる夢にしめてのたまはく、ちはやふる玉のすたれをまきあけて念佛の聲をきくそうれしき。近比、大原に良忍上人とて貴人おはしき。阿弥陀佛の【七才】示現によりて、ゆつう念仏といふ事をとひすゝめられるに、かの名帳を人もかゝるに、日本國中の六十余州の多少の諸神一人もれす入給へり。おのゝ念佛百反なり。乃至鞍馬の毗沙門梵王帝尺まで入給へり。これまちかき不思議にあらずや。これによりて汝今日より後は、神の御心にあひかなはんと思はく、仏をそむきたてまつる事なかれ。又みつからとなふるまてはなくと、念仏をきゝておそるゝ事なかれ」といへは、女いはく「神と佛とひとつにてはなれぬ中にておはしましつらんこと、いまこそきけ。さては佛をもおろかに思ひたてまつるまじきこそ。其によて、我主人にておはします人のもとへまかりかよひてみれば、殿はおほやけわたくしの御さた、女房はこかひいとくる【七ウ】さばくり、君たちはかりすなとりをいとみなみて、念仏なと申事はなし。さて御房たちのやうなる乞食非人こそ念佛は申事なれば、人のならひととして、果報わろき物のすることをはいまゝしくおほえて、目にもみし耳にもきかしと覺、よき人のふるまひをこそ本にもすへけれと思ふなり。この事をは又いかゝ心うへき」と申せば、僧云「汝主人といふはいか程のよき人ぞ。又なんほう上臆たちぞ」と問へは、女云「事あたらしくと給物かな。わか主人はこの所には左右なきぬしなり。此所こそ世のすゑになりておとろへたれ。昔はきけは押領使といふ官にて檢断の代官をせられしかは、よろつにおちられ、政

所の御掾ゆるされて、百姓の殿原をはしにも見くたしておはせしなり」と申せば、僧いはく【八才】「まことに左右なき人にこそ。それをゆめゝかろしめ思ふにはあらず。されとも念仏はいふかひなき乞食非人のみこそ申せ、さもあるよき人は申さすとの給へは、貴人も高人も念仏を行し給たるためしおろゝ申さん。きゝ給へ。抑この念佛申はしめ、又一切衆生に念仏申せとすゝめ給し人は、むかし天竺に悉達太子と申し人、發心修行して尺迦牟尼仏にならせ給き、かの佛一切衆生におしへての給はく「我およひ十方三世の諸佛もこの念佛三昧によりて成仏せり。汝等もすみやかにこの念仏を申て浄土にむまれ、仏になるへし」との給へり。しかるをかの仏の俗姓を尋ぬれば、昔は四州のあるし轉輪聖王の末孫、いまは三界の獨尊無上大覺の法皇なり。これはいかゝ【八ウ】いやしき人とは申へき。かの押領使殿にもよもおとり給はし。しかのみならず、如來この念佛三昧の法をもて、迦毘羅王國の淨飯王にさづけ、難陀國の頗羅璃王におしへ給き。いかゝ如來四姓の高元万基の主に對して下界の法をさづけ給はんや。就中、淨飯大王はまさしき如來の御父なり。いかゝ尺尊、親の御ために不吉の法をときて不孝の咎をまねき給はんや。しかのみならず、如來滅後にとりても、鷹場國の大王、日夜六時に念仏三昧を行してつゝに往生をとけき。唐の高宗皇帝は念佛三昧の導師善導和尚に帰して、滅後に至までも寺額を賜へりき。その後、法照禪師といふ人ありき。つねに五會念仏を行せらる。帝王これを【九才】迎て宮の内の人をおしへておなしく念仏を行せしめき。しかのみならず、佛經説をみれば、如來在世よりもさきの往過去のいにしへも國王の念

仏に入給へるためし、けうけすへからず。略して一両を申さば、跋陀和國の斯吟轉輪王、念佛三昧の法によりてつゝに成佛の果を得たりき。又無邊精進王并に二人の王子念佛三昧の行によりて、父は無上の佛果を證し、兩子は菩薩の法位にのほりき。又父を害する惡王ありき。比丘のおしへによりて七日念佛を行せしかば、おのつから逆罪滅するのみならず、地こくの衆生をもすくひき。本朝日域におきては、一條の天皇は慶円座主の知識によりて、最後に念佛をとなへて往生を遂、後三条の天皇は御大漸本定のさきに當心みたれす、【九〇】念佛しておなしく往生を遂給き。これらの自國他州の諸王等は、これ十善の帝位にのほれりといへとも、なをこれをもちて九品の眞門をねかひ、一天の尊主たりしかとも、なをこれをいとひて、万徳の法皇につかへ給き。いはんやそのほか異國の事はしけし。我朝にとりて、月卿雲客五位六位乃至都鄙の高僧諸國の四輩、昔よりいまに至まで念佛の門に入て、これをもはら行する事あけてかそふへからず。略して小分を申さば、堀川の入道右大臣、入道右大臣俊房、権中納言源顯基、參議左衛門督大江朝臣、右近少將藤原義孝、但馬守源章任朝臣、範光民部卿入道、大江為基朝臣、おなじき定基朝臣申人の中には、唐には白居易、本朝には慶保殿及賢人の右府等なり。此人々【一〇一】は一向念佛の行者なり。しかのみならず、汝か主君の檢断代官して人におちられしと名稱すれとも、それよりも人におちられし人々も、まさる後生をおそれて念仏にいりし人々少々申さば、右親衛藤原將軍、鎮守府將軍平惟茂、前伊豫守源頼義、同子息入道源義光、遠江入道朝時、熊谷入道戀西、上野國讚岐右衛門弘繩、同山上の孝満入道、お

なしき酒長の入道等なり。この人々はみなこれ累葉武勇の家よりいてたりしかとも、ともに西方の念佛門に入にき。女の中にも賤からぬ人々念佛門に入したためし、少々申さば、昔佛在世に韋提化夫人ならひに五百人の侍女に對してこの念佛三昧を説給き。又釋種の後たちそのかす一万二千人、同音に佛の御名を唱へしかば、現身の疵忽【一〇二】にいゑるともに佛弟子となりにき。震旦には隋の文帝の皇妣、西方の葉を修せしかば、臨終に異香宮の内に満き。汝か主君にはまして也。たし善人といふに二種の儀あり。凡夫は富貴自在の人を善人といふ。諸佛は捨惡持善の人を善人と名付。これにて聖教をみれば、若念佛者當知此人是人中分陀利花といひて、念佛の人をもて最上の善人と名付たり。又念佛の人は文殊師利とひとしき。念佛の人は觀音勢至を友として、つゝに花臺に坐すととき、又念佛の人はその心佛のこととあかし、又念佛の人は如來のかすに入事なりと演たり。しかのみならず、念佛の人は如來のかすに入事我ことしとおしへ給へり。しかれば、佛菩薩にすきて善人は誰かあらん。この故に【一〇三】なんち今日より後は、夢々念佛の人をくたしめいやしむ事なかれ。かくいふ程に夜もすてに明にけり。こゝにとりての神子、おなじ姿なるか來て、「いかになに事をの給そ。この晝よりきけは、ひまなく物かたるの聲し侍は」といへば、あるしの神子こたへて云「夜部より修行者」とまりたるか、この晝念佛を申給へば、いかに御房は人のもとにとまりてはよき事をの給はて、かやうにいまくしく念佛をば申給そと申せば、南無阿彌陀佛といふ事のいまくしからぬやうはいふことをたまふをきいて候な

り」といへは、この隣の神子は、はるかにまさりたる念仏にくみにてありけるあひた申やう「こよひあやしく不浄夢のみえつるは、かゝる事をきかんとてにありけり。きゝ給へ。此十年はかりのさきに、【十一ウ】正月の廿日ころとおほえしに、大路に人の念仏を申をきゝてあさましきことなり、たゞの月にててもなし、正月にしも十五日は過たれとも、かゝることをきゝつる事よとおもひて、やかて塩かきはらひせしかとも、ついにかなはずして十年か内に、九十になりし父、八十になりし母におくれで、ことしは我身にも大事の病をうけて、すてに死はつれし待りき。これは念仏の咎にはあらずや。すへてこの比は、あまりに人の念仏を申ゆへやらん、世の中もわるし、つくり物も実も入らず。されは、たゞきゝともきかし、悪事をはされとまかりなん」といひて立所を、あるしの神子「しはしゝ」とりゝとゝめて云やう「このものはしめはさおもひてありつるか、この御房の二々の事のいはれをのたまふ時は、さもとおもふ【十二オ】事もある也。就中に阿弥陀仏とはたゞ乞食非人のみ申事かと思ひたれば、きけはむかしより上臈たちの中にも申させ給けるそ」といへは、この隣の神子いはく「されはそれははかくしからぬ上臈たちにてこそはありつらめ。さるいまゝしき事をの給へはこそ、昔より上臈の中にひとりもいきたるはなかるらめ」といへは、僧いはく「さてかやうに念仏を忌給ふ神子たちの中には、一人も死たるはなきか」といへは、いまの神子いはく「それはいかてかしなぬ事はあらん」といへは、僧いはく「さては念仏の咎はなかんめるは。申人も死、申さぬ人もしなんには、何をもちかしらん、しぬるは念仏のゆへなりとは」と

いへは、このみこ、ことはすくなになりたれとも、へらぬていにてなをいはんとするを、もとの神子いはく「いやゝしぬる事はたゞなの給そ。なにの【十二ウ】とかにてもあらし。生れたる物はかならずしぬるならひにてこそあらめ」と申せば、この僧心におもはく、このあるしの神子ははるかにやおらきにける物を、此いまの神子、あらくこはきこそもちあつかひたれ。天魔のくるはしにや、たゞいままといひきて、物うちさまさんとする事よと。たゞゝ佛経説をみるに、一切衆生に女人はみな是母なりといへり、誰を誰と思へきにあらず。心のおよはん程は、こしらへてこそみめとおもひて申やう、「抑念仏はいまゝしきといひ給は、なにゝみえて侍そ。内典よりいてたるか。外典より出たるか。もし聖教の中より出たるか。およそ一代の聖教にはさらにあかさす。俗典の中にも記せず。なにを證據になへてか、この儀をのたまふへき。しかるをこの僧か心には、八万の教法をつたへきゝて、四依理盡【十三オ】の論義を勘かへみるに、念佛三昧に過たる祝事はなきなり。故はいかにとなれば、およそ人の物をいはひ思ふは、命もなかならん、身もたのしからむとこの二には過す。しかるを命のなかり物の事には仏に過たるはなし。たのしみのおほき所は極楽にしくはなし。しかるを、この南無あみた仏と申六字の心は、かの命なかりあみた仏のみたてまつりて、たのしみおほき極楽へまいらむといふ心を、ことはあらはしたるを南無阿弥陀佛とは申なり。これは又命みしかきなんをえて、苦をうけんといはふとにや、よもさはおもはし物を。抑正月にいふ事は善も悪もかならずかれに逢事にや。我心におきては心はおよはさるやらん、一とし

てあふとも覚えず。およそ命をは松竹鶴亀によせて、千秋万歳といはへとも、こそも死、こ【十三ウ】としもしぬ。富をは陶朱猗頓になぞらへて、福德豊饒といはふ。されともきのふもまつし、けふも貧し。しかるをこの南無あみた仏のことはに後生のいはるることのみならず、今生の祝に又最上なるゆへいかなとなれば、ある経の説をみれば、もし人佛の名号を持つる物は、現世安隱にしてとをくもろくの難をはなれ、諸罪おなしく滅す。未來にはまさに仏になるへしとけり。又ある経にはく、もし人弥陀を念ずれば、すなはち無量の罪を滅し、現には無比樂をえて、後生には清淨の土に往生すへしとけり。つらく此兩経の説を案するに、我等か年比もとむる所のいはること、なにのふそくかあらん。ゆへいかなとなれば、現世は安穩にして難をはなれ、たのしみをえん。後生には罪ほろひて、淨土にむまれ仏になるへし【十四才】と説。しかるを今生の祈は宿業かきりあり。かるかゆへに万か一もうへからず。後生の祈は來果うたかひなし。かるかゆへに萬か一もたかはす。又松竹鶴亀のいはるは、有為の妄法なるかゆへに、そのちからよはくして、今生一世もうへからず。佛法僧法の祝は無為の善法なるかゆへに、その力こはくして現當二世もうへきなり。たゞく如説に行せざるはかりなり。抑ちかころの人はあまりに念仏申によりて、世の中もわろく作物もみもいらすといふは、たれか傳をうけ、なにの文にかみえたる。夢にみたりとやせん、うつくにきたりとやせん。もしその證據もなくは、すみやかにわたくしのはからひをとめよ。我は念仏の吉例にして、不吉にあらざるためしを少々申すへし。抑南無阿弥陀と申ことはなにといふ

事【十四ウ】とか心えたる。これすなはちあみた仏と申佛の御名を口にてとなへたてまつるにてあるなり。かの仏はいづくにおはしますそといふに、西方の極樂國土にましますなり。その極樂といふ所はいかなる所とか心えたる。汝答へしといへは、女云「たのしき所と覺侍なり。そのゆへは、諸人の夏すしく冬あたゝかにして、心にかなふやうなる所をはほむることはには、極樂のやうなる物かなと申せは、よき所にやと心えたるなり」と申せは、僧云「なんちよく心えたり。さらんには、念仏によりて世中わるしとな心えそ。その故は汝か説のことくならは、かの阿弥陀佛の御名をとなふるたにも世の中わるしといは、ましてかの仏のまします極樂の世中もわるしといはんには、いまたきかす。八万の聖教ひろしといへとも、極樂を【十五才】そしることはをいまたみす。一代の法文おほしといへとも、阿弥陀佛を謗せさるを。極樂に阿弥陀佛のましますのみにあらず。仏經の説をみれば、極樂の人もとしなへに念佛を行するとみえたる也。これはいかゞ不吉のためしにそなへん。抑此念仏の法文は、いかなる人のこの世界にひろめはしめ給けるそと尋ぬれば、尺迦尺迦如來これなりかの人如來はいづれの世に出給へるそといへは、迦頻羅王國の淨飯大王の宮に誕生し給へり。かの淨飯王はいかなる人そと尋ぬれば、轉輪王種姓六十四の徳をそなへ給へるなり。かの徳の第一には國土寬廣五十四には五穀充滿す。四十九には威徳自在なり。五十七には不為他侵。六十二には無恠過告といへり。此中に國土寬廣と五穀充滿と云は、飢饉のなきことをあらはす。威徳。自生徳といふは惣して一切【十五ウ】の厄難なきことをあらはす。これはいかゞよき例といはさらん。

又かの念仏三昧この善法をひろめ給尺迦如來誕生し給とて、まつ淨飯王の宮に種々無慙の瑞現せし中に、或は王宮にめつらしきうつは物、しねんにありてよきあちはひみてり。食すれとも盡事なし。或は王宮に金銀瑠璃しやこめなうまにさんご一切のめつらしき蔵みなことごとく充滿せり。或は一切孕百婦產生するに難なし。みな安穩なり。或は二万の法蔵地より涌出しき。いはんやまさしく生れ給て後は、無量の吉祥の事なりしなかに、諸方の諸國王、大に慶賀してそのかず二万人也。この諸王ことごとく、淨飯王を礼拝して申て申さく、「善哉最勝王我願は為僮僕」といへり。これをはいかゞ吉例にそなへん【十六才】や。

次に震旦國に至ては、盧山の惠遠禪師、善導等はもと念佛三昧の導師般若又欣淨の先達なれば、天下の好悪をかへりみす、この法をひろめ給方もやあらん。白樂天と申聖人世にいて、年をうけたる事七十五歳、文をつくる事前^後。七十卷、先時もたくひなく後代もためしまれならん。しかるを卅九の年病を受しより極楽の曼陀羅を安置したてまつり、一向阿弥陀に帰し念仏を行しき。此人八代の御門にあひたてまつりて、國の吉凶を勘かへ王の徳失を商き。しかるを若この念佛の行、世々不吉の法ならば、汝賢人の身として傾城の法に帰すへきや。そのうへこの人は文殊の化身也。この菩薩法照禪師におなし念佛三昧の法をさつけ給ぬ。知ぬ、この法^は道俗兼行の法なりといふ事を。【十六ウ】文殊は諸仏の母なり。智慧の門にかたとれり。あに諸佛智慧ふかき法の徳失をかへりみ給はさらんや。次に我朝にとりては、欽明天皇の御宇に佛法はしめてわたれりといへとも、いまたひろめ行せられす。その第四の御子用明天皇の第一の皇子

聖徳太子の御宇に至りて、佛法をひろめられき。かの^皇御誕生の後、最初の發言に南無佛と唱へたまひき。つらく、この事を案するにさためて、その意趣あるか。恐らくは、これ吉祥の前相なるへし。ゆへいかんとなれば、この太子やうく人ととなり給て、仏法をひろめ給のみならず、又王法をたくしくし給き。およそ正法をもて國を治し、仁儀をもて民をめぐみ給き。しかるをもし此佛名唱る事不吉の法ならば、なにの心そ佛法と世善とひろまるへき。先、【十七才】表にこれをとなへ給はんや。又かの太子は年^手に佛舍利をにきりてむまれ、身より大光明をはなちてみえ給事つねなり。すてに身業の所作吉祥なりとす。なんそ言葉の發言不吉なりとせんや。又かの太子慈悲をもて仏法をひろめ、質直をもて天下を治し給き。すてに内心の存念りしやうのためにあらずといふ事なし。なんそ外儀の音聲いたて損、他のことはをいたさんや。又かの太子本地をきけば、大慈救世の觀音なり。あに救世の菩薩世にいて、弊世の法を行せんや。たゞし、しかりといへとも、かの御宇たにも不吉ならば、なをし不審ものこるへきにしたかて、又一天風しつかに、百官君にしたかへり。たゞし守屋の逆臣いさゝか朝威に背といへとも、これを治罰する事大鷹の小禽に【十七ウ】あへるかとし。これあに吉例にあらずや。其後、延喜の御宇は本朝の聖代なり。かの時空也上人世にいて、念佛の聲國土にみち、稱名のをと朝野にきこえき。しかるをかの御時をきけば、天下を治する事卅三年、旬の雨夜ふりて盡日の往復にわつらはす。政風朝にしつかにして民戸の火災をおこさす。これあに吉例にそなへさらんや。其後、一條の天皇は円融院の御子なり。七歳にして即位、

万事の才学文章詞花人に過たり。又伎藝無双の人をえ給へる事
前代にもいまたきかず。その中に源信僧都、学徒の一物にゑら
はれたり。彼の一人代の教法をひらきて、三巻の要文を集たり。
これを往生要集と名付。かの文にすゝむる所の稱名念仏を所詮
とし、往【十八才】生極楽を所期とせり。又かの天皇頼通関白
に仰付て、延暦寺へ往生をねかはんために持すべき要文勘かへ
て申すへしと宣下せられたりければ、谷々の学頭あつまりて一
切経論をひらきて、若有重業障無生淨土因乘弥陀願力必生安樂
國極重惡人無他方便唯稱弥陀得生極樂。この文をそしるして奏
し侍後、天皇したかて御臨齋（御臨齋）のきさみには慶円座主を知識とし
て、最後に念仏百余反してつゝに往生を遂給き。しかれば本朝
にとりては、口稱念佛の最初は聖德太子の御時、高聲念佛の繁
昌は延喜御門の御時、念仏流布は一条の天皇の御宇なり。この
三代の御門の聖代をいかゝ吉例とはいはさらむや。公家【十八
ウ】の最勝講の行は、これ天長地久の法會なり。南北の碩徳は
殊ことなれとも、段々に弥陀の名号をとなへ、諸社の正月の修
正は又福壽増長の神事也。初後導師はかはれとも、文くゝに如
來の寶号を誦せり。汝なんそ神子の職に居て神徳の法業を誇せ
ん。人民の身として帝王の興行を背かんや。上にはたゝ念仏興
行の時代、三國ともにみな吉例にして不吉のためしにあらざる
事をあかすといへとも、いまた念佛の功德によりて種々の災難
をのそき種々の利益をえたる證をいたさす。いまとをくは天
竺震旦の傳記をうかゝい、ちかくは本朝古今の例證を聞に、惣
しては三寶の感應にあつかり、別しては現益を蒙れるためし不
可勝計。た【十九才】とひ年月を曆ともいかゝ申盡さん。いま

略して小分をあかさは、昔一人の相師ありき。かゝみをとりに
みつから面をみるに、死相すてにあらはれて七日をすくへから
ざることをしりぬ。おとろきかなしみて、仏にまいりてこのよ
しを申。佛答てのたまはく「汝一心に念仏し、戒をたもたは、
此難をまぬかれなん」。相師悦て教のことくして七日といふに、
二人の鬼王まさしく目にみえて來れり。此念佛のこゑをきゝて
忽に去ぬ。その命のひぬ。

昔長者ありき。夜夢に十日中に死すへきよしを見つ。夢さめて
おとろきかなしみて、相師をめして我命を相せさすにおなし
く十日の中に死すへしと占なふ。前の夢にいまの相すてに一な
り。愈おとろきてかなしむ。【十九ウ】佛に申す。仏こたへての
たまはく「心專にして念佛し戒をたもち、ふかく三寶を信せば、
この難をのかれなん」。仍、教のことく行す時に、殺鬼ありて門
に來れり。功德を修するをみて走帰ぬ。これによりて命百年を
延たりき（延）。昔おほくの商人一船に乘て大海を過るに、摩竭大
魚口をひろけてすてにのまんとす。あき人なきかなしみて一口
同音に唱へていはく「南無阿弥陀佛得大無畏者憐愍一切衆生
者」とかくのことく三度一心に念し合掌礼拝せしかは、摩竭魚
佛の名号礼拜のこゑを聞て、憐愍の心もおこるににて口を閉て
海に入にき。（大悲經の
心をとる）

昔財徳長者といふ物ありき。その最愛の子に教て、南無【二十
才】仏と唱へさす時に、散暗鬼といふ物ありておさなき物をと
りてくらふ事ありき。此鬼このおさなき物をとりてくらはんと
するに、例のことく「南無仏」ととなふるに、此鬼口をふさぎ
てくらはす。鬼の身に忽に火付てもえたり。鬼かなしみて、い

まより後はおさなき物をとらしといふちかひをおこしたりければ、佛ゆるさせ給にき。觀佛三昧經の心

昔毗瑠璃王おほくの尺種をうちつゝ、その後達の中にみめかたちならひなく、才能人にすぐれたるをゑらひて、一万二千人までとりて本國に帰。高樓にならへすゑ、かやうに軍に勝たるよしをうたひて舞踊ければ、この后たち心うさのあまりにたゞもあらていふやう『汝軍に勝たる事をおのか高名にあらず。我らか夫達は一人【二十ウ】なりとも、なんたち千人にもまくまし。か□しつは物なりしかとも、かれらは佛にあひたてまつりて、禁戒をたもちたるゆへに、物の命を殺させしとて戦はずして心と害せられたる也。しからずは、汝等は一人もいくへき物にもあらず』といふ。ひるり王この事をきゝて腹立さらんや。大きにいかに、此后たちをせんたらにおほせて、耳鼻足手を切て眼をくしりつゝ、みな廣野においはなちてき。此后たちの心いかはかりかおほえけん。かの韋提化夫人の閉難にあへりしも、三箇のうらみはかりにこそありければ、かくはかり五躰の疵はなかりき。かれは又一人の事なりければ、申せはことあさし。これは一万二千人までのさしもゑらはれ、すぐられけん。こ五のすよそまでもさこ。そあはれに侍りけぬ。夫の王たちはみなかたはなはせななくみなくかたわになれたりけんきかたもなし。とにかくに思ひのあまりにはるかに佛の御方にむかひて『南無あみた佛く我等今者無有救護』といひしかは、尺迦如來こゑにつきて來給て、かたしけなく御手をふれさせ給しかは、一万二千人の後の耳鼻足手眼ともとのことくなりきに。うれしさのあまりにみな尼になりつゝ、佛の御弟子にな

りてき。

昔舎衛國に五百人の盜人ありき。國王にいましめられまいらせて、これもさきのことく、耳鼻足手を切、眼をやふられぬ。さて又高弥山といふ山の麓においはなちてき。この盜人ともかなしむ事かきりなし。今生こそむなくならぬ。若後生をたすからんために仏の御【二一ウ】もとへまいらんと思へとも、足かあらはやあゆみてもまいらぬ、手かあらはこそ礼拝をもせぬ、眼なければ仏みたてまつる事も叶へからず。こはいかにすへきと歎かなしむ。こゝに一人の盜人いはく『佛は一切衆生の願をみてさせ給なり。さすかに聲はかりはあれは、我等五百人一同に佛の御名を唱へん』と申は、又一人かいはく『かたわならざりし時、佛につかへたることもなし。あやまで仏の物をもはからず、かすめとりき。しかれはいかに御名をとなふとも、いかゝたすけ給へき』と申せは、一人か申様『佛は平等の慈悲にたましませは、善人をも悪人をもたゝおなしく一子のことくおほしめすなる物を、たゝ唱てみん』といへは、一度に五百人ながら南無尺迦牟尼佛と高聲に申す。佛その聲にしたかひて、【二二オ】高弥山の麓に行給て法を説、ねんころに教化し給しかは、五百人のぬす人一度にきすなをりて、もとの身になりきに。みなことくく羅漢果を證しき。靈鷲山の五百人の御弟子と申はこれなり。

むかし優曇大王、逸女といふ女人のもとへ忍てかよひ給き。こゝにかの王の后の中に、容顏人にすぐれ寵愛他にことなる人ありき。これを残。后たち年比ねたみ思て、あはれこれをうしなははやと思けれとも、させるついてもなくて過る所に、后たち心

を合て大王に申やう『君の寵愛の後、それかし心さしふかくおほしめすといへとも、逸女かもとへかよはせ給をうらみて、王宮を逃いて、他の夫とあひくせんとしたくするをは、君はしり給へりやいなや。若不蕃におほ**【二三ウ】**しめさは、あまたの後たちにとはせ給へ』と申せは、一々にとひたまふにみなおなし口にこたふ。こゝに大王大悪心を發して、みつから弓をはり箭を掛けて、彼后をいんとて宮のうちをいつへしとせめ給に、こゝにこの后いかにもかるへき方なければ、なくくいて給へり。その時のありさま、よそまでもまことにいかはかりかはあはれなりけん。たとひまことなりとも、女人。ならひ夫を一旦うらみて、さやうの事いふ事もあるそかし。されはとて、たちまちに玉のすかた花の兒はせをなさけなくうしなはん事は、目もあてられぬ事にてこそはありけめ。こゝにこの大皇すてに弓を引、箭をはなちて射給に、此矢后にはあたらすして、后を三廻めぐりて大王の前に帰ておちぬ。王腹に立しかり。ふしきの思をなし**【二三オ】**て、又射給へは先のことし。いよく腹立て又射給へは、又前のことし。かくの如く百たひみ給に、百の矢みな后をめぐりて王の前におちてあつまりたり。こゝに王弓をなけすて、『いかさまにも后たゝ事にはあらず。いかなる事をし、いかなる思ひにか住して、かゝるふしきをあらはず。はゝからすのたまへ』といひ給へは、后こたへてのたまはく『別の事はなし。我おさなくより心の内におもはく、かやうに大王寵愛を蒙らんによりては、此世は思事なしといへとも、一期夢のことくに馳過て、地獄に入なは、大王もちからおよはせ給へからず。況世の人誰かあはれと申さん。たゝさやうの時は、三

寶の御たすけにあらすは、まぬかるゝ事はなかななる物を、三ほうの御中には、西方の阿弥陀佛ことに女人悪人をあはれ**【三ウ】**みてたすけんといふ御ちかひのましますよしをきゝしよりこのかた、かの御名をとらふる事、毎日一万反也。花鳥風月の遊にもこれをわするゝ事なく、狂言綺語の戯にも思いたさすといふ事なし。しかるを、たゝいまおもはずに罪を蒙て、その命をたゝれんとす。是に於て我年比たのみたてまつる阿弥陀佛、命はかきりありてのかるへきかたなければ、申に及はず。後生はかならずたすけ給へ。たゝいま来て迎て、極楽へ往生せしめ給へと、この外は又思事なし』とこたふ。こゝにこの王、年比は邪見にして佛法を信せざりしかとも、たちまちに信心發て三寶に帰し、いよく此後の寵愛まさりて、偽の後たちは出されて、此后を善知識にして共に佛道に**【三四オ】**入給にき。昔一人の老女あり。年八十にあまりもやしけん。ある時國王の御幸をみて王に思ひをかけて、それより物もくはず、ふかき思ひになりて日比に成ける間、一人の男子あり。病の子細をとふに、この母答ていはく『我やまひは別の事にはあらず。かやうの事はいふにつけてはゝかりある事なれとも、いはすは後生も罪ふかき事なれば申なり。わか身の分際にてはわかくとても叶へきにもあらず。ましてこれ程老衰して思ひよるへきにてあらぬを天魔のくるはしやらむ。ある時御幸の次に國王をみたまつりしより、なにとなく物もくはれすして、かやうにすてに死門に及へるなり』といふに、こゝにこの男思やう、親の孝養するをは諸仏**【三四ウ】**も菩薩も納受をたれ、諸天善神も力を合せ給といへとも、此事はいかにも叶へしとも覺えず。いかさ

まにもおもひといひ老衰といひ、死給はんことはうたかひなし。これをついてとして、いかにも念佛をすゝめはやと思ひて申やう『此事は無下にやすく候』といひて、竹の籠といふ物をひとつとめてきりて、『智者の給は、この竹籠に念佛をはたとひとしく申入つる人は、かならず后になると申候。さもおもはせ給は、申て御覽せられ候へ』といへは、思ひのわりなきあひたもしやとて『やすき事にてこそあんなれ』とて、その竹のかこをとりにて口にあて、夜晝おこたらす一心にみたれす申て、三七日といふに國王の御幸ありけるか、なにとなくかの老女か家の方を御覽したりしかは、金色の光明そのうちよりい【二五才】て、十方を照す。不思議の思ひをなして、一人の大臣をつかはしてみせしめ給に、『端嚴美麗なる女人侍る。かの光なり』と申せは、王不思議の思ひをなして、みつから行て御覽すれば、まことにめもか、やき心もおよはず。面は満月の如し。眼は青蓮のごとし。白玉のはたへ沈水のかほりを薫し、丹菓の口よりは梅檀のいきを出せり。國王宮の内后とおもひあはすれば、玉と石のごとし。やかてひとつ御輿にのせつ、王宮に帰て、第一の后にたてたまひき。病をやめ命をのふる事はためしあれども、老衰の姿をわかくはなやかに轉する事はありかたく、たくひすくなき事なれども、仏法にはふしきのちからおはしますうへに、阿弥陀佛の名号はことにふしき也といへり。これもなんのうたか【二五ウ】ひかあらんや。

昔毘舍利國の人民五種の悪病をうけて、一には眼あかき事血のごとし。二には耳よりうみしるいつ。三には鼻より血なかる。四には舌つまりてこゑなし。五にはくしもの化して鹿魄となる。

六識閉塞してなをし酔人のごとし。五の夜叉面黒事墨のごとし。おもてに五の眼ありてけあしき牙上よりいてたり。人の粧氣をすふ。良醫の耆婆その道術を盡せりといへども、たすくる事あたはず。時に月蓋長者そのかしらとして病人を部領して、みなく佛に帰す。これにて頭をたいて哀をもとむる。その時に世尊大悲をおこして、病人に告ての給はく『我等か身におよはず。これより西方に阿弥陀佛觀音【二六才】勢至まします。なんちいままきに焼香散花して、五鉢を地になけてかうへをたいて心をちらすして、十念のあひたをへよ。さためてしるしあるへし』とおしへ給へり。こゝに長者をはしめて、もろくの病人おしへのごとく、一心に求哀す。余時彼仏放大光明觀世音勢至一時に共に至りて、大神咒を説て一切の病苦みなことくく消除して平復する事、もとのごとしといへり。

昔唐土に異國より軍發りて責來るときこゆ。これによて、その國の人民あるひは他國へ逃行、あるひは深き山にかくれこもる。こゝにある人、年四歳になる女子の二の眼しいたるをもちたる。父母なきかなしみていはく『此子を【二六ウ】いたきて逃はかたくわつらいにて、にけのひすして敵に害せられなんす。捨置てはいかなる馬牛にもふみころされ、犬鷹にもくらはれなん。いかすへき』とかなしむ所に、此こ申すやう『我をくしておはせんによりて、父母の命もあふなくおはしまさんには、た我をすて給へ。我一人こそ死すとも、父母の命はたすかり給へし。三人ともにしなんよりは、一人こそしなめ』と申。これをき、父母さこそは覚けん。聲もおししますなきさけふ。さてしもあるへきならねは、すてに敵はちかつきたりときこゆ。此故

にたゞすてんよりはとて、『若一日か二日もや命のふる』といひて、ある塚穴のありけるにいて行て、これをおくとて、父母か云様「汝か云こく三人ともにいたつらに死せんよりは、せめては一人にてものこり【二七才】」たらは、先立物の教養をもせんとて、この塚穴に汝をはをくなり。我戀しくおほえん時又つれくならば、南無阿弥随佛ととなふへし。しからは我そのこゑにつきて、夢にもまほろしにもきたりて汝をはこくむへし』となくさめいひければ、この子ふかくたのみて『さうけたまはりぬ』といひて、さて他國に行て我身は安穩なりといへとも、ありし子の事を思ふにいきたるかひもなし。夜もひるもやすき心なし。子の事をのみなかき思ひとかなしむ。かくして四年といふに、世中しつまりて、かの父母本國へ帰るに我家にはゆかすして、かの塚に行て骨をもとりてよき所にもおかんとて、父母ともにかのつかあなのもとへなくく行て内に入てみれば、端嚴美麗【二七ウ】なるおさなき女子の七八はかりなるかうちゑみて、『いかに今日はおそくおはしましつるぞ』といへは、父も母もあさましくおそろしく思ひて、我子とはつやく思はて『なに物ぞ。おに神の變化せるか。野干のいつはりはけたるか』といへは、此子申やう『いかにれいならず事あたらしくかやうの事をはとふぞ。一とせこれにおかせ給しはしめ、。を戀しく思はん時は南無阿弥随佛と唱へよと候しかは、やかて念佛をこたらず。したかて又父母二人なから來て、日ことに目出たきくい物をたひてくはせ給き。かの物をくいしかは、やかてその日より目もあきて、今日まではなに、つけてもわひしき事はなし。しかるを今日おそくおはしつるをこそわひしと思ひはしめて侍

に、又かくあやしみとはせ給こそ心えね』と申す。【二八才】愈父母思はく、阿弥随佛の我等かかたちに變して、けふまてはく、み給けり。たゞなくさめことはにこそいひたりしに、あはれにかたしけなきことかなとて、昔より今日まではかなしみの涙をなかつといへとも、又今日よりはしめて随喜の涙をそなかしける。さてこの子をいたきとりて、もとの家にかへるに、此事を天下のしりけるあひた、國王までもきこしめして『ありかたき事也。せんあく三寶の御利生を蒙ふれる物なり。かの女子御覽あるへし』とて、すなはちめされて御覽あるに、まことにみめかたちあいきやうつき姿ことからけたかき事、三千人の后の中におもひくらふるにかれらは及はず。これによて親のもとへもかへらし給はて第一の后にさためたまふ。これによて、父母も車【二八ウ】馬をとはし、國土もゆたかに、國王この后を善知識として佛法をむねとし給き。昔よりいまに至まで、阿弥随佛の現在の御利生念佛三昧の明證を少々申さは、遠く他州の事はしはらくをく。ましかく日本我朝にとりては、嵯峨の天皇の御時、三條中將と申人ありき。子のなき事を歎きて、北の方二人して願を發して、『ねかはくは三寶我に一人の子息をあたへ給へ。しからは三寸の金の阿弥随佛をつくり、五尺の銀の卒都婆をつくり奉りて立へし』と。さて其後いく程もなくして、此北の方懷妊ありて端嚴美麗なる女子を生り。此女子の七歳といふ年、その母やまひ付て臨終に及へり。こゝに中將と姫君とをよひて遺言していはく『此子のせめて【二九才】は十歳にならんまてはいきはやと思へとも、生死のならひはちから及はず。すてに死なんとす。かまへてこの君十歳にならんまては、繼母に

みせ給な。又この金の阿弥随佛は且は汝を祈こひたてまつりし時の佛なり。これを我形見とも思ひ、我母とも主ともふかうたのみて身をはなちたてまつる事なかれ』とて、ふところの内よりまほりふくろをとり出して、姫君にたてまつりてやかて程なく死ぬ。中將姫君いきしにかなしめとも、かひなし。姫君はこの佛を母ともたのめとの給しかはとて、身をはなれずしてつねに香花を手向、毎日に念佛する事一万反おこたる事なし。さる程に、中將遺言をもわすれて、さてしもひとりあるへきなら
【二九ウ】ねは、北方迎て年月を過るに、この姫君十三といふ年、嵯峨の天皇『もろくの月卿雲客九重にまことにすくれたらむ美女一人尋て丸にえさせよ。しからはいかなる賞をもたふへし』と。こゝに或人申ていはく『三条の中將の御むすめこそありかたき美女と申うけ給候へ。さためて君の御心にあひかなひ候ぬとおほえ候』など申すに、やかて中將に『すみやかにかの姫君したてゝまいらせよ』とて吉日をさためられぬ。中將悦てそのいとなみをす。こゝにこのまゝ母のおもはく、この姫君まいりなはさためて我子のかの所従になるへし。いかゝしてとゝめんとして、かの姫君のかたなるおとなしき女房の大納言殿といひけるをよひていふやう『ひめ君はすてに【三十オ】まいり給へし。たゝしいとけなき姫君のはしめておのこゝにあはんはあまりにうゐくしくして、いたくおとこなれぬもわろき事にてあるなり。しかれば、女房夫のまねをしてゑほうしひたゝれをきて、姫君とたはふるゝやうにすへし』といへは、この女房なに心もなく『さうけ給はり候ぬ』とておしへのまゝに、日くるればつねにこのまねをしけり。こゝにこの継母中將に申

やう『なにとかくこのさはくりをはし給ふらん。よに本意なきことのあるなり。たゝことはにて申さは、もちい給まし。夕くれかたにみ給へ』といへは、なに事ならむと思ひてのそき給へは、一人の男とたはふれすとみ給ぬ。中將あさましといふはかりなし。おさなくて母におくれしよりして果【三十ウ】報わろき物とは心えたりしを、なにしにとりおきけんとして、やかてものゝふをめして『たしかに嵯峨野にて頭を切て頭をもちてこよ』とてくしてつかはしぬ。さかのにてひめ君をおろしてをくに、『これはなにとせんするぞ』とのたまへは、こたへていはく『しらせ給はずや。いかなる御あやまりのわたらせたまふはしりまいらせず。この野にて御頭きりてまいれと候へは、さてこれへはわたしまいらせて候也』と申は、姫君我身にあやまりありともおほえねとも、『やうこそあるらめ。さりながらも、しはらくいとまえさせよ』と。『日ことに念佛を一万反申候。今日の所作をいまたしもはてぬなり』とのたまへは、物のふも『さうけ給候ぬ』とてまぢるたれば、念仏しはらく申て佛をとりいたしたてまつりて、前に【三一オ】すゑたてまつりて、『南無西方極樂世界の阿弥随佛。われおさなくして母にをくれて、今日又父のふけうをかうふりて命をたゝる。いまは佛より外はたのむへきことなし。命はかきりあれはのかるへきにあらす。後生はたすけ給へ』とて念仏申て『とくきれ』との給へは、武士もさすかに岩木ならねは涙にくれて東西もおほえす。されともちらなき事なれば、すてに切て頭をはとりて、中將にたてまつる。中將これをまほり、朝夕出入所のくちにかけて、にらみにくみけり。さてしはらくある程に、嵯峨野に天皇御幸ありて御狩を

せさせ給に、はるかなる谷におさなき聲にて『ねかはくは、わか母我をたすけ給へ。ねかはくは、佛我をたすけ給へ』といひければ、あやしみて人をつかはし『三一ウ』てみせられければ『端嚴美麗なるおさなき女人一人侍り』と申。天皇あやしみおほしめして、よりに御覽すれば、まことに目もかゝやくほととなり。顔は春のあした、紅梅の露にひらけたるかことし。姿は秋の夕への女郎花、風になひくじにたり。『こはいかなる物そや。天女のあまくたりたるか。鬼神の變化せるか』など、はせ給へは、『我はこれ三条中將の娘なり。いかなるあやまりかありけん。こゝにおくりおかれたり』と申す。さては、我吉日をゑらひてめさむとする女人にてあんなれ。世の中の不思議かなとて、やかくて御輿にのせまいらせて、王宮にかへり給ぬ。さて中將をめてして『汝かむすめはいてたちおほせたりやいなや』とはせ給へは、中將そらなきうちして『俄に死【三三才】て候へは、ふかき山におくりおきて候』と申。こゝに天皇、几帳をかきあげて『これはたれぞ』とはせ給へは、中將あへて申事もなくてこほれ出にけり。抑朝夕にらみつる頭は、さりともいまたあるらんとてゆきてみれば、ちいさき金の阿弥陀仏の御くしなり。あまりのふしきさに、やかてもちてまいりて、天皇にありのまゝに申す。『この仏の御身はさてはおはしますらむ』とてかの頭きりし所を御覽するに、金の阿弥陀仏の御身はかり光を放ておはします。さてやかてとりたてまつりて、かの御くしにさしあはせまいらせられたれば、もとの御佛なり。さて銀の率土婆とはいまた寶藏におはしますといへり。

中比、鎌倉にある人のもとにめちかくつけつかふる女あり。【三

二ウ】立居に常のことくさには、たゝ南無阿弥陀佛といふことをいひけり。これをこのあるし、年比にくしと思ける所に、ある年の正月一日陪膳するとて、この女物に足をけつまつくとて、つねの事なれば思ひもあへず『南無阿弥陀佛』と申たりけり。主人おほきにはらをたて、この女をとらへていはく『わ女のたゝの時申たにもにくしと思所に、けふしも阿弥陀仏と申は、すてに我をのろうにこそあれ』とてかりまたを焼て、かほにさしあてゝ骨にとほる程にやき付ておい出しつ。さてこの人いふやう『我とし比にくしと思つる魔事の外道は今日といふ今日なかくはらひつ』とてよろこぶ所に、この女まへにうちいて宮つかふたにふしきと思ふにかほにはりさきばかりも疵なし。こは【三三才】いかなる事こそとあさむ。抑夢にしたるかと思て『さてもなんちをは勘當しつると思ふに、いかにかくは前にはあるぞ』とては、女いはく『させるこの程は御かんたうかうふる事もなし』といふに、いまくしふしきにおほえて、さては人たかへに他人を勘當したるにやとたつぬるに、我こそといふ物なし。返々ふしきの思にちうしてすくるほとに、なにとなく持佛堂にまいりてみれば、金色の木像の阿弥陀仏の御かほにそこへこかれとをる程に、かりまたの火印のかたあり。これは當時の事なれとも、さきの事にあひたかはねは、つゐてに申なり。豊後國高田の水河といふ所に、たところにてありける男、中風してありけるか腰などもいて、つやくあしもなへ【三三ウ】たりければ、きうちかすもしらすしけれどもかなはず。しはしこそ妻子眷屬もあつかひけれ、あまりことになりければ、みあつかふ物もなし。さて、この男は大小便をいながらしければ、

すかきをやふり、たゞひとりいさりにてしける程に、三年に
りにける年、夢にみるやう、おそろしげなる鬼のいてきてく
てゆかんとしければ、かの男思ふやう、『我は十三の年より一向
に念佛を申す。なんそこの鬼の手にかゝるへき。阿弥陀仏たす
け給へ』と一心高聲に念しまいらせければ、阿弥陀仏光をはな
ちて來給き。いよく信を致して念し奉りておかみ申ける程に、
この鬼も失にけり。さて夢もさめて、ふしきの事かなとて過け
る程に、中風もなをりてものとことくになりけるとそかたりけ
る。【三四才】これらは不吉例にはあらずや」と申。こゝに女と
ひていはく「さきにも申ごとく、よろづの人のつねのことはに、
夏はすゝしく冬はあたゝかにありて、すこしも心にかなひ、よ
き所をはほむるとては、極楽のやうなると申せば、極楽たのし
き所にこそとは心え侍れとも、いかにもたのしきやらむもしら
す。この世に人のたのしきと申も、淺深ありてすこしたのしき
物もあり、中程にたのしきもあり。極楽はいつれのらくにかあ
たりたるらむ。たとひ大にたのしき所なりとも、大臣家にのそ
みて公卿一人のけいきをみたてまつるも、御所田裏にまいりて、
院大やけの御ありさまをおかみたてまつるもかきりのあるにお
もへは、極楽とかやもいかてかこれ程はたのしくましますと
おほゆるはいかに、これもひか事を思ふにや。【三四ウ】又かの
阿弥陀佛と申給んも上臈か徳人か僧か俗かこれもしらす。くわ
しくおしへ給へ。いまは我らか一向にたのまんすらむ人にてま
しますなれば、心たてまでもしりたし。人のたのみたらんにた
のみかひありぬへき人かや。こゝに僧一時物もいはて、涙をな
かしてうちあんしていはく「凡夫の愚癡のほんなうはかり心う

き物はなし。なんち愚癡の至にあらずは、かゝることはをいた
さんや。汝心をしつめてよく／＼きけ。抑極楽はいかなる所と
しりて、御所内裏にはまさらしといひ、阿弥陀佛と心えて院宮
にはおよはしといへるそや。まつ経に極楽の有様をときていは
く、窮盡三世所有劫讀一佛剎諸功德三世諸功猶可盡佛剎功德無
窮盡といへり。この文の心は、三世の劫をへて【三五才】極楽
めてたき事をほめに、三世の劫は盡ともたのしき事はほめつ
くすへからすと云。或は無量の佛無量の舌の一々のはしより無
量の聲を出して無量劫かあひたほむとも盡しかたかるゆへに、
極楽と名付といへり。又佛の御名を八功德しゆとなづく心は、
一切のよき事をおつめ、一切のたのしき事をおつめ、一切の悦
をおつめ、一切のすくれたる事をおつめたるを佛とは申なり。
この故に或経をみれば、その果報のてん／＼してすくれ給へる
事をたとへあげたり。かの経の心はいは、たとひ閻浮提の一
切衆生をおつめて一人の轉輪王の果報にくらふるに、百千億に
及はず。たとひ四天下の一切衆生をみなこと／＼く轉輪聖王と
なるとも、その果報を合て一人の帝釋の果報にくらふるに、又
百千【三五ウ】億にも及はず。乃至三千世界の一切衆生をみな
こと／＼く四禪の梵王となれらん、彼果報を合せて一人のさい
後の菩薩の果報にくらふるに、又無量無邊億百千倍にもおよは
す。たとひ十方一切無量の國土の衆生をみなこと／＼く最後身
菩薩となれらんその果報を合て、阿弥陀佛の御身の一毛孔の果
報にくらふるに、無量無邊億百千倍にも及はずといへり。始よ
り轉々して次第にあひまされること十轉なり。いはゆる國王輪
王帝尺魔王初禪王二禪王四禪王緣覺菩薩佛となり。しかるを汝

最初の國王の果報くらへて、なを佛はおよひ給はしといへる、愚癡の至にあらずや。さきにおとれるとはそのかす無量なり。後のまされるはそのかすひとつなるをや。況、又一倍二倍【三六才】にあらず。百千万億無量億倍なるをや。佛の一毛の功德猶かくのごとし。いかにいはんや内證外用の一切の功德をや」といへは、女申ていはく「まことに阿弥陀仏の極樂のめてたくましますありさま、たいかいうけたまはり侍ぬ。けにもさい限ほとりもなき事にて候けり。たゞし大概は奉て候へとも、おなしくは所のしたる人のけいきいかていに侍そや。又いかなれば死もせてたのしく候そや。田島おほくて公事などのすくなく候か、上のおたしきによりて民のやすく候か。又人の家造なんともしんしやうに侍るにや。又山なともちかくて薪ていの物もおほく候か。又河ちかくて水をつかはんためも便宜よしや。かの人にはなに事をかしてさもたのしく侍そ。宮仕をするか。あきなひをするか。田島を【三六才】つくるか。藝能をたつるか。それまでもくはしくかたり給へ」といへは、僧のいはく「後の極樂のめてたき景氣有様は、諸の経論の中にあかせる事、万くにして申盡しかたし。わつかに要をとり、せんをぬきて申さん。心をしつめてき、給へ」。【三七才】

慈巧上人極樂往生問答下（外題）

「極樂のありさまといふは、みな瑠璃の地には金繩道をさかひて湛然平正なり。大陽の天には樂器そらに飛て宮商相和せり。八功德の池には四色の蓮花さかんなり。ひらきてその香八方に薫し、四面の岸には七重寶樹枝をたれて影を水の中におうつし、龍頭鶴首の舟は天童棹をさして八徳水のうゑにうかひ、鳧鴈鴛

鴛の鳥^は。妙法文をさへつりて金砂の砌にあそぶ。寶水の浪は黄金の岸によせてしきりに橋戸迦の鼓をうち、清冷の風は栴檀の樹をふくにはるかに金鉅羅の琴をしらへ、万々たる宮殿には金銀の簷をならへて内外百練の鏡をみかき、重々たる樓閣には七寶とほそをあはせて上下万顆の玉をつらぬく。およそ寶堂重々にして寶幢寶網風になひき、【一才】廻廊廣々として寶幡瑠璃四方にめぐり、しかのみならず衆寶莊嚴の樓の上には、諸天常にあつまりて讚佛の曲をうたひ、金繩界道の道のほとりには、衆鳥翅をならへて和雅の音をいたす。寶林寶樹のもとにいたては仰て七寶の花をとし、玉樓金閣のうゑにのそみてふして一子のともをよはふ。曼陀曼殊の花雨のごとくふりて瑠璃の庭に忽に蜀江のにしきをしき、寶鐸寶鈴のかさり星のごとく映す。青天の空にはるかに混瑜の玉をつらぬ。上品蓮臺の暁の樂心すみて歡喜の涙おさへかたく、黄金樹林の夕への色眼かゝやきて踊躍の心しつめかたし。四邊階道のかたをさきは、久住の菩薩あつまりて微妙樂を奏し、庭の舞臺のうへをみれば、初生【一ウ】の聖衆立て廻雪の袖を翻す。およそ寶樹の花四方にひらけて金谷の春にあひおなし。寶網の光空に照して南樓の月にことならず。百味の飲食もともめされともしきりに前に現す。そのあちはひは心にまかせてさらに世路そうくくのいとなみをなし、五色の衣装はたしなまされとも、つねに肩にかゝれり。その色好にしたかひてまたく損壞洗濯のわつらひなし。蓬來を尋されとも妙法不しの薬にあひき。仙洞にいたらされとも長生不老の私たちをえたり。およそ所はこれ不退にしてなかく三つ八難のおそれをまぬかる、命は又無量にしてついに五衰八苦のかなしみ

をのかれたり。ついに中央の講堂にまゐりて初て弥陀如来をおかみたてまつれば、三身即一の御姿に万徳円満【二才】の相をそなへ、尊時無雙の御かたちに見者無厭の法を具し給へり。烏瑟たかくあらはれて晴天みとりこまやかなり。白毫右に廻て秋の月に光みてり。慈悲のまなしりきよくすみて青蓮花のごとし。説法の啓うるおひて頻婆のこのみににたり。およそ六十万億の形軀は金山王のごとし。へんせう法界の光あきらかにして日月輪もたとへにあらす。八万四千の相海は春の花色をましへ、四十八願の瑠璃は秋の露袂をつらぬ。観音勢至は威儀尊重にして左右の寶座に對せり。補處の菩薩は合掌恭敬して四面の内陣に圍繞せり。海會の聖衆は右に廻て種々の歌嘆をうたひ、諸天童子前にたちてめん／＼に供養をのふ。本國の諸天ははるかに虚空に飛て微妙の花をふらし、【二二】他方の菩薩はまぢかく佛前にすゝみて天の曲を奏し、抑我らこの事をきかん時、歡喜の心いくそはくそや。思きや、昔五道の貧里にまよひて、つぶさに刀山劔樹の涙にむせひし心に、いまは九品のたのしき宮こむまれて、あくまで常業我淨のゑみを開くへしとは。はかりきや、いにしへ四魔の悪友にかられて、とこしなへに煩惱の業苦にかなしみしつみし心に、いまは三せうの賢聖にともなひてほしきまゝにちうきやう向地悦にほこるへしとは。呪弥陀如来大悲の水をくたしてそのいたゝきにそゝくに、無明塵勞のあかたちまぢにすゝかる。観音勢至解脱の衣をもてその身にきせらるゝに、三賢不退の位すみやかにせうす。これよて外には卅二相【三才】をそなへ、内には六通三明をくし、心には天鼓伽陵のこゑをいたし、衣には栴檀沈水の香をくんす。しかのみならず、宮

殿身にしたかひて空に飛て、さらに他方往復のわつらいもなく、ほう物心にまかせて所々に現す。あに供佛施僧さはりあらんや。これよて十方の淨土に往詣して無量の諸天を供養し、六種の苦海に遊戯して無量の教化す。おほよそ致所には聞法記別の利益にあつかり、帰路には濟度衆生の面目をほとこす所なり。爰此女、涙をうかへて合掌して云「まことに極樂のめてたき事、阿弥陀佛の御ありさまおろ／＼うけ給ぬ。けにも心もことほもおよはぬ事にて候けり。いまこれをわつかにうけ給たにも、身の毛もよたち涙もこほれてそゝろにたとく侍に、ましてまさしくまいりたらん【三ウ】心ち、いかならむとおほえて、かねて悦いよく／＼おほゆ。しからは、けふよりは万事を次にして、極樂にまいるへきしたくをいとなみ侍るへし。但かくは申すとも、仰らるゝことはともか大旨は疊字とかやとて、心えられぬ所はおほく、心えらるゝ所はすくなし。たゝ願はくは、我らかことくの物のきゝしりぬへきやうに、たゝ人にむかひて世間の物かたりするかことく、極樂の事をあかし、阿弥陀佛の事をときてきかしめたまへ。るりの地には金繩道をさかふとのたまへとも、何といふ事やらんしらす。太陽天には樂器空に飛とはきけとも、いかなる事とも心えかたし。しかれば、たゝ寶樹寶池といふはそれ／＼なり、宮殿樓閣といふはしか／＼なりと、こまやかにてをとりて、おしへたとへをかりてあかし給へ。せんする所は我らか落とゝまらむするつい【四才】のすみかたのしき所なれば、かねてゆかしくてあまりにきゝたきといふ。僧いはく「此條はまことにいはれたり。經論の文といふはもと梵語といひて、天竺のことはなりしかは、漢土の人は心えかたきによりて、翻

經の三藏と申し上人たち、漢土のことはにうつしかへ給へり。しかるを又漢土のことはを我らかごとく日本の人は心えかたきによりて、いまこの秋つしまのよみくんのよみといふ事はいてきたるなり。しかるを汝は又このつしまのよみくんのよみをも心えずといへは、我今かたくなることは耳かかなるたとへを以、説教へし。佛も機にしたかひて法を説給へは、三寶もゆるし給へ。見聞の人々あさける事なかれ。まつ極楽といふ文字はきはめてたのしともよむ。たのしみをきわむともよむなり。しかあれは、名をもても心うへし。【四ウ】尤願へき所なり。天上にもたのしみおほしといへとも、五衰のかなしみきたるによて、きはめてたのしき所といふへからず。神仙も命なかしといへとも、死苦をはなれされはたのしみをきはめたる身にはあらず。たゝかの土にむまるゝ人のみ無量の樂をえて、しかも命盡る事なし。故に極樂と名付たり。抑極樂世界のありさまといふはきげよな。地も家もろゑ木も池もおよそありとある物はみな無量の瓊寶をもてかさりなせり。しかれとも凡夫はさのみ心えかたきゆへに、經論におほく利益キヤクして七寶といひて七の寶をあかせり。その寶といふは、一には黄金きなる色。二には白銀しろき色。三には瑠璃あをき色なり。四には車渠青く白き色なり。五には瑪瑙しろにふき色なり。六には珊瑚もよ【五オ】き色なり。七には琥珀くれなるにふき色也。たゝし七寶はこれらにすぐれたる事百万億無量なり。かるかゆへに、かの直法をある經にときてはいはく、たとひ三千大千の國土なりとも、かの土の七寶一両のあたひに及はずといへり。しかるをその勝劣をくらふれば、無量なりといへり。畧して少分をいたすへし。一には

こゝの七寶は光なし。かの七ほうは光十方にみち満ていたらすといふ所なし。二にはこゝの七寶はかうはしからず。かの七ほうは無量の妙香ありて十方にかうはし、その香をかく物は、大に心をよるこはしむるのみならず、種々の利益をうるなり。三にはこゝの七寶はすきとほる事なし。かの七寶は重々無量にかさなれとも、てりとほりて一々にみえずといふ事なし。四にはこゝの七ほうはかたくこわくし【五ウ】て、しかも破やすし。かの七ほうはやらかにしてしかもやふれず。五にはこゝの七寶は盜賊等の難あり。かの七寶はこれらの諸のなんなし。六にはこゝの七ほうは滅しつくる期あり。かの七ほうは廣劫をふれともめつしつくる期あるへからず。七にはこゝの七寶はおとりてしかもせんふんなり。かの七寶はまさりてしかも廣大なり。かくのことく無量の瓊寶をもて、しかしながら建立せる國土なれば、佛の無量の弁舌をそなへ給へるすら、説盡すへからずのたまへり。況凡夫は心もことはおよひなんや。しかれとも大旨その少分を申さん。尋られつるるりの地にはこんせうみちをさかうと申は、かの土はるりをもて地として、こかねをもてみちとせるすかたのゆかますしてすくなる事、こかねのなはをはれるにいたる【六オ】といふ事なり。しかのみならず、金の地なる所にはるりをもて道とし、瑪瑙の地なる所には銀をもてみちとせり。ないしかくのことくのおのゝ色をかへ形をかへて、或は千寶万ほうを地として、七寶をみちとせる所もあり。かくのことくの衆寶莊嚴の地のうへに、瓊妙香光の花ありて世界に充滿せり。香はしくいつくしき事かきりなし。そのろゑをふみてゆけば、足の入事四寸、あしをあくれは、もとのことし

といへり。抑汝か領する所の田地いくらばかりあるそや。「わか所領の地はたゝこの家のあとばかりなり。それたにも我地にあらず。人の所領をあつかりたり」といふに、僧又とひていはく「その地によりてなに程の所得かある」と。女こたへていはく「この地の故にあげてもくれてもわつらふ事のみ。あれとも、させるゑこも【六ウ】なし。たゝかやうの家つくりてゐたるはかりなり。およそ色くの公事をつくのはんとするに身もつかれ、方くのつかひをついそまんとするに心もつかれぬ。しかれば、たゝうちすてゝいつちへもまかりなはやおもへとも、さするに鳥獸ならねは、のゝすゑ山のおくにもすまず。又いつくとても地の中なればさこそあるらめと思て、なげきなからかくて侍るなり」。僧いはく「汝それをもてもおもへ。いそぎこの土をいとひ、すみやかに彼土を願へしとは。そのゆへ如何となれば、汝かこの屋敷のちと、かの極楽の地とおもひくらへてその淺深をかんかるに、無量無邊なりといへとも、略して七種の勝劣をあかすへし。一には汝か座敷の地はわつかに家の跡はかりなりといふ。極楽の地は廣大なる事無量無邊なり。二にはなんちかこの地はみな土砂【七才】石瓦なり。極楽の地は金銀等の珍寶なり。三にはこゝの地は高下あり。かの地はしつかなる海のおもてのことくして、高下なく平々としてうるはし。四にはこゝの地は雨のふり水の出れは、あるひはくつれうせ、あるひはとけて泥のことくなり。日くれてはかたくなりて、あるひはわれさけ、或ははいとなりて人をけかす。かの極楽の地はこれらの難なく、いつも變する事なし。五にはこゝのちは地によりてさまくのなげきをいたす。極楽は地によりて種々のたの

しみをなす。六にはこゝの地は劫の盡ん時はみなかけうせげなん。極楽の地はついに滅しうする事なし。七にはなんちか家の敷地は人の領をあつかれり。極楽の地は阿弥陀仏の汝かためにまうけ給へる故に、往生しぬれば則かの地のぬしとなりぬ。汝これらの【七ウ】勝劣を思ならへて、もしまさるにつく心あらは、すみやかにこの土をいとひてはやくかの土をねかふへし」といふ。こゝに、この女か男とおほしき翁なり。はしめより臥居て、この問答をはきかぬか、この晝にいたてやおらかしらをもちあけて申やう「御房にたつね申へき事あり。極楽とかやの地のこゝの地にすくれたる事は、おろくうけ給候ぬ。ことにめてたく候。それにとりてひとつのふしんなる事は、さやうにかの地みな金銀てい物にて候はんにはやは田畠にはつくられ候はんする。たとひ種をまきけりともやはやおひ出候へき。もし又田畠をつくらては、いかにとしてかの土の人は命をはつき候へき」といふ。僧いはく「この人間界にたに劫のはしめには衆生の果報すくれたるによりて、田畠つくらされとも【八才】地餅とて甘露のことくなるめてたきい物自然にありしかは、それをすくひてすき候。いはんや天上などには劫のすゑなれとも雨時も田地を耕作する事なし。いかに況、極楽世界の果報は彼天上にすくれたる事無量無邊倍なるをや。しかればまして人間界をためしとしてかの土の事をうたかふ事なかれ。それにとりて極楽の人の田地を耕作せざるに二のゆへあり。一にはかの阿弥陀仏の本願身によりて、七寶の鉢に百味の飲食充滿して時をえて現す。色をみ香をかくにことく飽満しぬ。なんの不足ありてか、わつらはしく田地のさはくりをすへきや。二にはかの土に

生れたる人は淨妙無為の身をうれば、食を服せずして年月をすくれとも、またく物もののほしき【八ウ】ことなし。いはんや飢かつうる事あらんや。しかれば、なによりてか、すゝろに田畠耕作の儀あるへき。次に宮殿樓閣と云は、惣して極樂の家なり。それにとりて宮殿といふはこんほんの家、たとへは内裏にとらは清涼殿紫宸殿のことし。樓閣といふは所屬の家、たとへは廻廊中門房町などのことし。又樓閣とは塔のごとくに、もこし重くにかさなりて百重千重くみあけたる家也。宮殿はかならずしもしからず。たゞ大きにかめしきはかりなり。たとへは寺くの本堂のごとし。その外の外の四邊の階道はかの宮殿殿ろうかくのあひたに、あなたこなたにあひつゝきてわたしたる橋なり。七重の欄楯とはかの宮殿樓閣および階道の廻にかさなれる高欄なり。これらはみなことくく七寶をもてつくれるなり。いはゆるしこんの柱には【九オ】白銀のけたをわたし、るりのたるきをかけ、すいしやうのかわらをふき、さんこのいらかをあげ、瑪瑙の床をしき、車渠の四壁をかこめり。或は白銀の柱にはるりの桁を渡し、水精の垂木をかけ、珊瑚の瓦をふき、瑪瑙の甍をあげ、車渠の床をしき、しこんの四壁をかこめり。かくのごとくの七寶をいろへ色光をかへて、おのく莊嚴せる事あけてかそうへからず。しかのみならず、ある宮殿みれは一向こかねにてつくるもあり。佛銀にてつくれるもあり。およそ處こに樓門をのそめは、七寶百寶をもてたてならへたり。重々の塔婆をまほれば、千寶万寶をもてくみあけたり。いはんや、多百間の寶の廊方くにことにくりて、いつれかはしめ、いつれかおはりともみえず。これにて【九ウ】まさしく阿弥陀仏のまし

ます所をは中天講堂ともいひ、あるひは大寶宮殿とも申す。これは七寶のみにあらず。真珠明月摩尼持海尺迦毘楞鉢鉢迦寶等の無量無邊の珍寶をもて、莊嚴せるなり。抑いかんその草庵とかの極樂の宮殿といつれかこのもしきとおもふ。つらく思ひくらはよ。松の柱たるすかきなにかは心とまゐるへき。すみやかにかのはりのかへ、さんこの床をねかへ、いかゝるりの戸ほそ玉の簾をもとめずして、あなかに柴のあみ戸こものとはりをおしまんや。しかのみならず、わらの墻萱の廂は、もし火付なは、なんちか命もあやうし。朽たる棟石のおそい風ふかは、汝かかうへもあやうし。抑この家はなんちいつりまうけたるぞ」とへは、女答ていはく「この家もまたく我家にはあらず。てうまう人のあととなり。地ぬしにかりうけてやとり【十オ】て侍るなり。これにて、やふれ損すれば我咎なりといひて、あけくれおはるれとも、さりとはまかるへき方もなしとつれなく侍るなり」。僧いはく「しかれば、それにつけても、いよくこの家をいとひてかの土の家をねかふへし。その故いかんとなれば、汝かこの家と極樂の宮殿とに無量の勝劣あれとも、七種をいたしてみすへし。一には汝かこの家は人の寶家財をかりたりといふ。極樂の宮殿はもとより阿弥陀佛の我らのためにまうけ給へるなり。かるかゆへに、往生すればやかてかの家のぬしとなる。これにて、聖教には極樂をは我らか本家と名付たるなり。二には汝かいゑの材木は藁と木とは過す。極樂の宮殿は無量の珍寶をもて作れり。三には汝か家はたゞこれ一なり。極樂の家はその数無量無邊なり。四には汝か家はたかさ一丈には【十ウ】過す。かの家はたかさ數百由旬なり。五には此家は、火に

やけ風にやふれ雨にくち水になかれ、かくのとき難あり。かの家はこれらの難なし。六には此家はたとひ風火の難なくとも、年月へぬれはいたつらに朽うす。かの宮殿は多劫をふともくち失へからず。七にはかの宮殿はもし人他方へゆかんと思時は、ぬしにくして空をとふ。人間界の家はしからず。人間界の家といふ物は主ととも無常なり。しかれば汝いかに惜ともこの家にわかるへし。三のゆへあり。汝かよはひをみるに臨終すてにちかし。しかればいまも眼ふさき、息とまりなは、此家はよそになるへし。二にはたとひ汝命なくして百年千年たもつとも、焼うするといふ事してきたらは、片時のほとに家にわかるへし。三にはたとひぬししなす、家やけすとも、家主さやうにおう【十一才】なれば、まめやかにおはれば、この家はすて、出へし。この故に汝いまよりはかゝる無益の家に心をとめすして、ついのすみかなる不退の家をもとむへし。こゝにさきのおきな申やう「又不審なる事侍り。極楽の人の外へゆかんとする時、その家ともに空をとほ、もしふみはつしておちてあやまちはしする事やあらむすらん。たとひ落すとも、家々風なとにふかれて道にてやふれおつる事は待るまじきか」。僧答云「天人の宮殿も虚空にこそたてたれ。日月星宿の宮殿も虚空をこそめくれとも、いつかはおつる事ある。これははかししなから、かの果報力の不思議なり。いかにいはんや佛菩薩の神通福力は言語道断の事也」。こゝにこの女てを合て、涙をなかけて申やう「あなめてた、あなたうと、なによりもかの極楽の宮殿をあみた佛の我らか【十一才】ためにまうけ給たるらむ、かたしけなさは。それになにとてかゝるつたなき家のみすみつらむ、は

かなきよ。日比は凡夫のはかなきは地獄もすみかとして、此家なれともわきてわひしとおほえさりしか、いま御房の、給事もきくに、けにも案しつゝくれは、この家のとかのおほさかすへつくすへからず。藁墻あはらにして風もたまらねは、冬はさむくたへかたし。板吹破られて日の光さし入は、夏はあつくたへかたし。雨ふれはもりにぬるゝ事、大路にあるかことし。火たけは煙にむせふ事、地こくもかくやおほゆ。しかのみならず、くちなは蛙こゝにはい、かしこにとひ、いたち鼠めぐりになき、みゝすむかて下にむくめけは、日くるれば、めもあはずおそろしき事侍り。一とせ大風に石のおそひおちて、さい愛の子【十二才】一人はうちころされ侍りにき。そのゝちはいさゝかも風ふけは、いまそ家もたふれぬると肝心も侍らず。かゝる家にのみすみながら居たる心なれば、我主人のもとへ時々もさし出たるおりは、ひろくとおほえてすゝしく心ものとか也。御所内裏熊野御たけなとへまいりたるおりは、あなめてたとおほえて、身の毛もよたち、そゝろに涙もこぼれて帰らんこともわすれぬ。いかにいはんや、かの極楽へまいりて、はしめて七寶莊嚴宮殿樓閣をおかみたてまつらん心ち、いかはかりか侍らむ。そのうへつらゝ物を案するに、わか家と申もおそれにては候へとも、かの御所内裏と申もたゝおなしく木にてこそつくりたれ。たゝし、かれは大にとりつくるひ結構し、かさるはかりなり。これたにもかくこそおほゆれ。まして極楽の宮殿は、しかし【十二才】なから、金銀にて侍らんめてたさよ。いはんや又これらの金銀には百千万億まさりたるらむ七寶をや」と申せば、僧いはく「汝めてたく心えたり。かやうにあさきより深

におもひいれつれば、極楽をねかふ第一の往生の心たてなり。次に寶樹といふはたからのうへ木とよむなり。そのゆへは、かの極楽のうへ木はしかしなから、さきに申つる七寶乃至無量の瓊寶にてあるあひた、寶のうへ木とは申なり。あるうへ木をみれば、紫金をもてもとゞし、白銀をもてきとし、るりをもて大枝とし、水精をもて小枝とし、さんこをもて葉とし、瑪瑙をもて花とし、車渠をもて菓とせり。あるうへ木をみれば、白銀をもて本とし、瑠璃をもて茎とし、乃至かくのごとくたかひに七寶をいろへ色光をかへて、莊嚴せる樹世界に充滿せる。【十三才】しかのみならず、もと枝花みともみなこかねなる樹もあり。本枝花實ともにみなしろかねなる樹もあり。ないし七寶百ほう千寶をもて莊嚴せる事あけてかそふへからず。此もろくくの寶樹の枝のあひたには、たからの瑠璃をたれ、うへにはたかからのらまうをおほへり。時にすゞしき風來てこの樹をふくに、色くくの光みたれかゞやきて、かうはしき香にほひみてり。又枝葉るりのうごく事、たとへは百千の葉を奏するかことしといへり。汝思へし。この世にたに春の朝にかすめるあともとかなる里に、梅桜のさきちるをみれば、面白くこそはおほゆる。いはんや、かの七寶のありさま、さこそめてたかるらめ。寶池といふはたからの池也。これも又もろくくのたからをもて莊嚴せるゆへに、寶の池と名付といはく、黄金の池には底【十三ウ】は白銀の砂なり。白銀の池にはそこは黄金の砂なり。水精の池には底はるりの砂なり。かくのごとく、寶に七寶ないし無量の寶にて色へかへたる、その中には八功德水も充滿せり。又衆寶の蓮花といふは、金銀等の衆寶にて莊嚴せり。是によて青き蓮

花にはあをき光ないし、しろき蓮花には白き光しかのみならず、鳧鴈鴛鴦の鳥、水のうへにうかひて、鸞鏡に玉をおくかことし。栴檀寶樹の花は浪の底にうつりて、蜀江の錦を洗かことし。然をもろくくの往生人、かの寶池に入て水を沐浴する時、ふかからむと思へは、奥にいたらされともあさくなる底には、金の砂てりかゞやき、ふかけれともあさきかことし。かみには寶の蓮にほひかほりて、遠けれともちかきかことし。又なつかしき菩薩衆とゞもに七寶の【十四才】橋をわたりておなしく葉を奏してたかひに往來し、めつらしき諸童子おなしく妙法の舟にのりて、ともにさほさしてたかひにあそひたはふる。かくのごとく、寶池にのそみてもたのしむ事かきりなし。こゝにこの翁申さく「まことに極楽のありさまをうけたまはるに、なに事もおろかなる事は候はねとも、くい物のさしもゆたかに候なるうへに、池の水さへ甘露のあちわひにて一たひたへつれば、物もほしくもなく病も失候らんこと、ことにめてたくおほえ候なり。かく申候へは、下臍はまさなくてくい物に入たるやうに、人きゞは候へとも上臍と申もかやうの下臍かちからを盡して、たしなみいたして候を、あきみちてましませはこそ尋常にやさしくもふるまはせ給へ。しからすは、たゞ下臍とおなし【十四ウ】事なり。凡、雨をねかひ水をもとめ風をにくみ日をいとひ、時としてやすき心もなし。かやうに身心をついやして候へとも、わたくしの物はさい少分、おほくは君の物となる。しかるを極楽の人のわかちからも露ちはかりもいれず、めてたきくい物にあきみちて待るらん事、まめやかにうらやましく候」と申せは、かの女はいはく「食物のこともさる事なれとも、き物の事いつれ

かおとりたることに、きものゝ事はわかさはくりなれば、身に
しられて大事におほゆるなり。およそこをかひ、あさをはくよ
り、てしていとをくり、をゝひねり、きぬを織、布をおり、か
やうにしてき物になしたれとも、つねにあかつけは、つねにあ
らひ久しくなれば、やふれぬ。又やふるれば、これをつくろは
んとす。かくのごとく、き物は破はつるまで、ちからをついや
し、いとまを入す【十五才】といふ事なし。しかるを、極楽の
人はき物もしねんにきられて侍る歟。いまたうけ給らす」と申
せは、僧云く「さきに五色の衣はたしなまされとも、つねに肩
にかゝれり、その色このむにしたかひて、またく損壞洗濯のわ
つらひもなしといひつるはこれなり。それにとりて、極楽にむ
まれてはじめて佛前にいたる時、さたまれる儀式にて、阿弥陀
如来大寶蓮花の御座よりおりて、かたしけなくも手つから大悲
の水をもて、往生人のいたゝきにそゝき給なれば、觀音勢至左
右の寶座よりおりて、むけの衣を授給。この時にあたりてたち
所に不退三賢の位にのほりぬ。むけの衣といふは、あたひなき
衣といふ事なり。そのゆへは、三千大千世界の國土をもてかう
とも、かの衣一のあたひにはおよはず。かるかゆへにあたひな
き衣といふなり。又【十五才】不退三賢の位にのほるといふは、
まさしく佛の御子となりて、菩薩の司になるといふ事也。たと
へは、國王のいふかひなき民をめしあけて我子にせんと給て、
手つから灑水をもて、そのいたゝきにそゝき、身をきよめ給へ
は、一二の王子御衣をもてこれに授て、ともに皇子とさため給
はんかことし。およそ人身にとりわきて、用事なる物四
種あり。くい物ときものとしき物と薬となり。その中に衣食の

二事とて食物と着物とすくれたる大事にてあるなり。これなく
は、世間の事のかくるのみならず、仏道のさまたけともなる也。
かるかゆへに、聖教に云、凡夫の行人はかならず衣食を用いる、
これに縁なりといへともよく大事を弁す、はたかにうゑてやす
からざる物は、道法いつくんかあらむやといへり。又これをゑ
んとするに、汝【十六才】か云かごとく、その力をついやす事
かそへつくすへからず。かるかゆへに、聖教に云、食には八百
の苦力を費す、衣一たつぬるに又八百の苦力をいるといへり。
しかのみならず、軍の陣に望て命をうしなひ、とをき國におも
むきて身をほろぼして、およそむつましくしたしき中をもたか
ひ、したかふまじき賤き人にもしたかふ事おほくは、これ衣食
のゆへなり。しかるを、極楽にむまれぬれば、衣食自然なるに
よりて、一切のわつらひなし。いま又人間の衣食に浄土の衣食
を對して、その勝劣をかんかうるに畧して七種あり。一には人
間の衣食はもとむる時一分の苦勞を入す。二には人間の衣食は
求る時わつらひおほきのみにあらず、得て後水火盜賊等の難を
おそる。極楽の衣食はこれらの難なし。三には人間の衣食はゑ
て後うしなはん【十六才】事を歎のみならず、失つれば辛苦惱
乱する事、毒の矢にいられたるかことし。極楽の衣食はこれら
の難なし。四には人間の衣食は苦勞おほく入てうる所は甚少し。
極楽の衣食はくらうはまたく入すして、得る所きはめてゆたか
なり。五には人間の衣食小分にして、しかもその色あちわひし
たみにおとれり。極楽の衣食はおほくしてしかもその色味ます
くまされり。六には人間の衣食は毒もあり薬もあり。極楽の
衣食はみな薬なり。七には人間の衣食はこれにて身命をほろ

ほし、罪業をまねく。極楽の衣食は身心をいさましめ、善根を
ます。しかれば、汝くひ物着物のゆたかなる事をうらやましと
思は、いそぎ極楽をねかへ」と。こゝに女、涙をなかしと
を合て申やう「先にも申かごとく、くい物もおろかなる事な
けれど【十七才】ことにき物は大事に思ひ侍るに、さしも極
楽の衣のめてたくして、しかもともしからす候らむ事のめてた
さよ。就中、我すかたを御覽せよ。あさの衣のかたもやふれた
れば、はたへもすてにあらはなり。これにて、夏はあつく冬
はさむきのみにあらず、かやうに人の御覽するもはつかし。年
よりぬれは洗も物うくて、あかつきよこれけからはしき事かき
りなし。あはれとくしてこのつゝりをすて、極楽にまいりて
かの寶衣をきる身とならばや。この世すら賀茂八幡にまいりた
るに、さるへき世にある上臈、女房などの衣装は、色々にと
のへてにほひかほれるをみるおりは、めてたくうらやましくこ
そおほゆれ。ましてかの無價の衣とかやのいかにめてたく侍る
らん。阿弥陀仏とくして我をむかへて、かの衣をさつけ給へ」と
とぞ申す。こゝに、僧【十七才】いはく「汝能く思へり。淨
土をねかふといふは、これにていにやすくはからひて、つねに心
を催すへきなり。次に數物と云は、さきにも申ごとく、極楽世
界には七寶莊嚴のうへに衆寶の妙衣をもてあまねくしきみて
り。一切の往生人はこの上をふみてありく。衆寶の蓮花をもて
しき物とす。かの蓮花のさうを殊にとける事、心も詞も及はず。
最略して心をとりにて申さは、かの蓮花の葉。かさなれるかす八
万七千なり。一々の葉ごとに八万四千のすぢあり。一々の筋こ
とに八万四千の光あり。又一々のえうのあひたことに、万億の

まにしゆといふ玉をもてかさりとすたと説給へり。これらをも
てかの土の數物とす。しかれば、汝か數物とかの土の數物と又
其勝劣を案するに、かの土の數物は寶衣寶蓮なり。汝か數物は
やふれ、むしろや【十八才】ふれ薦なり。しかのみならず、か
の土のしき物は錦と金とをもて、しかもこれを莊嚴せり。汝か
數物は繩と藁とをもて、これを莊嚴せり。いかゞこれをいとひ
てかれをねかかはさらんや。次に薬と申は、極楽の境界は目にみ
耳にき、鼻にかき舌になめ身にふれ心に思ふ一切の境界たえら
かなる薬にならずといふ事なし。又勝劣を申さは、この土の薬
は身の病をのみそく。かの土の薬は心の病も又のそく。こゝ
の薬は病ばかりをも除もあり、のそかさるもあり。彼土の薬は
身心の病を決定して除なり。この土の薬は口に服し身にぬるに、
くるしくいたまし。かの土のくすりは見聞覚知みなともに心を
よろこはしむ。この土の薬は病いゑて後又おこる。かの土の薬
は一度病をのそきて後又おこる事なし。此土のくすり【十八才】
はもとむるにゑかたし。かの土の薬はもとむるにゑやすし。し
かのみならず、遊行の時いたりて空をゆけは宮殿身にしたかひ、
地をあゆめは寶花あしをうく。これにて、わつらはしく馬く
ら牛車もなにかせん。又身に盜賊なければ、弓箭の兵具も入
らず。心にふそくなければ、一切のけまうおこらず。この故に
かの土を極楽とは申なり。こゝにこの翁、涙をなかし合掌して
申さく「極楽淨土をたのしき所とはおろくき侍りしかとも、
かくまてとはおもひ候はず。たうちまかせたるこの土にとら
は、大名徳人御所内裏のごとくなるかと思はへりつれ。無
下にはかなき事を思候けり。たとへは、井の中の蛙の大海もか

くやおもひ、夢はむ虫の甘露の味もこれにはまさらしと思ひたるかことし。但一の不審なる事こそ【十九才】候へ。いまは一向に極楽をねかふへきにとりて、つらく物を案し候へは、なに事もあひにたる事かしうはよく候なり。その故は、我が身のほとをかへりみよ。いふにかひなき下臈のしかも年まかりよりたれば、きたなくおそろしけなる事、鬼にことならず。これにて、みる人もきく人もにくみうとむ。しかるあひた、したしきあたりへたにも、おほろけならては、さしいつる事もなし。いはんや又そのしないやししくたりたれば、さるへき人のもとには、縁のはしへたにもほせられず。まして、御所内裏などへは門の内へたにも思かけなし。いかにいはんや彼極楽のさしもかたしけなく、けたかくまします阿弥陀佛觀音勢至の御前に、さしもやさしくやむことなくおはします天人聖衆の御中へ、おほけなくこの身の分際をもて、いかてかまいり【十九才】のそむへき。たとひまいりたりとも、この姿様してさし出たらは、すてに老の恥にてこそ候はんすらめ。たとへは、花の蘭にひきかへるの入、孔雀鸚鵡にふるつくのましはらんかことし。しかのみならず、栴檀にほへる無價の衣、いかこの身やうにてはき候へき。又金銀をちりはめたる寶座の蓮花のうへには、いかこの足やうしてはのほり候へき。又かゝらむ物にはやはや阿弥陀佛も觀音勢至も物をも仰られ、かくへきこの事いか、心え候へき」と申せは、僧いはく「おなし人界にむまれたる一類の凡夫なれとも、僧俗男女その心ことにして、貴賤上下そのふるまひ一にあらず。いはんや、佛の御心を我らか意趣とは、はるかにかはれる物なり。ゆへいかなとなれば、およそ佛の御

心といふ物は、輪王天王の位をもうやまひ給はず。田夫野人かしのくたれるをもしやし【二十才】み給はず。悪魔毒龍のいかりて來れるをもおそれ給はず。天女のこひてむかふをもあひし給はず。長者居士か万物にゆたかなるをもへつらひ給はず。貧窮乞かいの食にともしきをもかろしめ給はず。たゝおなしく一子のことくにあはれみて、ともに浄土にいれんとのみおほしめすなり。これにて、たのみをかけまつらんとたにも、ねかへは汝かことくの物も、またくきらひ給事なし。かけのことくつきそひて、夜晝まほりたまふ。臨終にはかならず極楽へくして帰たまふなり。たゝし、あはれみの御心はおなしといへとも、念したてまつらされは、國王大臣なりといへとも、因縁へたゝるかゆへに、佛もちから及給はず。此利益にはもるへし。因縁へたゝるといふは、水の物をぬらせとも、ちかからされはぬらさず、火の物をやけとも遠きをば、やく事【二十才】なし。又わたしもり人をえらはす、わたさんと思へとも、人來りてわたらんとはいはず船にのる事なければ、渡守も力およはず。しかのことく、仏は衆の生死の大海をわたさんとのみおほしめせとも、衆生わたらむともねかはされは、本願の船をうかへなから、佛も力およひ給はず。この道理を因縁へたゝるなどは申なり。しかるを、汝佛をふかかたのみて、極楽の彼岸に渡らんとたにもねかはく、ゆめくその姿のわるき事を歎事なかれ。そのうゑ、又極楽にまいるといふは、この身なからまいらはこそみめ姿わろしとて、あなかに卑下せめ。こゝにすてゝその玉しる極楽にむまれぬれば、めてたくたとき身となるなり。されは、聖教にいはいはく、このけからはしき身をすてゝ、かの土

のつゐにたのしき身となるともあかし、【二一才】又瓦礫變して金となるかことしとへたる也。その金のことくの身といふは、兪佛菩薩の身となるといふ心也。その佛菩薩の果報の目出き事、さきの十轉のたとへにきこえぬ。しかれば楊貴妃李夫人の花の姿なるかたち、上陽人王昭君か玉にみたるゝすかた、西施南威かゑめるたひに千金をすてしかほ、潘安仁かゆくたひに、万葉をなけしよそおい、我州には衣通姫小野小町などいふ、かやうのかたちよき人、十方の國土に充滿したらんをとり合たりとも、極樂の人にならへんに、その一毛かさきにも及へからず。しかるを、又人界の人はいかにかたちよしといへとも、その身不淨なる事たとふへき物なし。かの土の人は、その身清き事金銀水精の器のないけともにきよきことしといへり。又人間の人はすかた【二一ウ】よしといへとも、その身の不淨なるによりて、その香くさくけからはしく、かの土の人はその身しやうくゝなるによて、その香もかうはし、梅檀沈水もたとへにあらず。かるかゆへに、汝この土の姿わるしとて、かの土の人めをはゝかる事なかれ。こゝに翁か申さく「極樂へはこの身なからまいるかと思てこそ、身の程はおほえてはつかしくけからはしく思ひ侍りつれ。さやうにめてたき身にまかりなり候はんすらむ、たつときよ。それにとりて、この翁はもとより下臈のはてにて候へは、さるへき人の御前にて物申すやうもしらす。そのうへとしまかりよりたれば、こゑもわなゝきつゝ、申いたすもくるしく、しかるを極樂へまいらたらむ時も佛たちの物はし仰られかけたらむ時、この聲やうと申ことはのきかすさと申、いかゝして御返事も申候へき」。僧【二三才】いはく「極樂へま

いりぬれば、先に申つるやうに形のてんくゝしてすぐれたるかことく、こゑもてんくゝしてめてたくなるなり。前のたとへをもて心うへし。それにとりて、極樂の人は四弁八音などいひて、そのこゑに種々の徳ともおほけれども、さのみ申つくすへからず。又汝も心うへからず。その中にせうくゝあかさは、心うへきなり。かの土の人の聲はあはれにおもしろくて、しかもとをくてきくもひきからず、ちかくてきくもたかゝらず。きく人は罪を滅し又功德をます。その徳を説は、衆生は機にしたかひて色くゝにきく、弁説をいへは、一切衆生同時各別の不審をたつね、一ことはこれをこたふへしといへり。しかれば、かゝらん弁説音聲をもて、いかてか佛の御返事を申そこなはんや。この故に汝、こゑわなゝきことはきかすとして、淨土【二三ウ】の人をはつる事なかれ」と、翁又申さく「つらくゝ世間の人を見きくに、みめことからよけにて、物うちいひたるもつきくゝしけれとも、けんにはその心ひかみて不得心の物になりぬれば、一端はいみしきやうなれとも、つゐにはみおとされてよるつの物にもにくまるゝなり。されは、下臈の常のことはには、うちみに形しゝうは心と申なる。しかるをこの翁かせいしやうは、やかてこのつらににてきわめたるゑせ物なり。下臈のはてにて候うへ、老ほれても侍れば、ちたひにはまつ物かおほえ候はぬなり。これによて、申へき事をも申さす。申ましき事をも申すなり。およそ東西もわきまへず、善悪もしらす、さ程ならば又なに心もなくして、ほれくゝとたにあらは、人にも不便かゝるへきに、きはめて腹かあしくて事なら【二三才】ぬ事のとかくゝしき、させるあやまりもなけれとも、あなつりゑたりかましく、

うはを打事ひかけもせず。さるかとするは、又きはめて欲はふかくして、よろづの物をは我物にせはやとのみ覚る、おほえずとは申とも、物のもちい心はたれよもかしこし。いかにいそかしき道をゆけとも、とさまなる堂寺などに法事はしのあるには、聴聞事をは思もよらてさせる小法師原の身ならねとも、僧せんのおろしやくるゝとて、おとなけなく其日はまほりくらしぬ。さることすれば、この年としてなりけなき物のくせなればわかき。また女心が失ずして、よき女房たにもとほれば、おほけなくさされる目をみはたけて、うしろのかくるゝまでそみらるゝ。これによりて、過にし比はある所にてめの童のとほるにとりつきて、あをの「二三ウ」けにけまるはかされて、腰の骨をつきたかへたり。かゝるゑせ物にて侍れば、たとひ極楽にまゐりて候とも、佛も一旦こそ不ばかり給とも、この根性やうはし御覽してん後は、あきともあきはてゝにくしめ、なみせそとて、極楽をもおいゝたされもやまいらせんすらむ」と申せば、僧いはく「極楽にむまれぬれば、かたちもこゑもあらたまりてよくなるかごとく、その心もよくなる也。たゞし汝かいふ所のその根性といふは、則三毒の煩惱といふ物なり。三毒といふは貪欲嗔恚愚癡也。よろづの物のほしく女人のわすれかたきといふは、すなはち貪欲の煩惱なり。腹のあしきといふは嗔恚の煩惱なり。物のおほえぬといふは愚癡の煩惱なり。この三毒の煩惱はたとひ浅深こそかはれとも、汝一人にかきらす。衆生といふ衆【二四才】生の具せざるはなきなり。およそこの煩惱は一切のほんなうの根本なり。汝及一切衆生の六道に輪廻して種々之苦をうけ、生死の盡る期なき事は、しかしなからこの煩

悩の所爲なり。これにて煩惱といふ文字をはわつらひなやむとよむ也。そのゆへは、この煩惱のおこる時も身心をわつらひなやまず。又このほんなうにて罪をつくりて苦をうくる時も身心わつらはし、なやまずゆへなり。又毒と名付事は八百四千の煩惱の重病をおこし、乃至身にうくる所の四百四病もみなこれよりおこりて衆生を損害する故なり。しかるをかの極楽にむまれぬれば、これらの煩惱のあしき心をみなことごとく滅しくすなり」。翁又云「これこそなによりも大せつに候なれ。せめてはみめかたちの事はもとより、下臍にて候へはよしとて【二四ウ】わろしとてなにかせん。たゞこの根性にこそよろづの人もにくまれ、いたる所にはあまり候つれ。しかるを、この根性の大難失候なんには阿弥随佛にもよもにくまれまいらせし。但又大なる不審ひとつ候。翁か身にはこのわろき心のほかに又心ありともおほえ候はぬをめつしつくしなは、さては極楽にては心えなき木石のやうなる身にて候はんするか。この事又いかん。僧いはく「すてに前にははずや。形のよくなるかごとく心もよくなるを、わろき心のめつするといふなり。その善心の相無量無邊なりといへとも、しはらく三毒に對して三の浅深をあかすへし。一には清浄の心。二には慈悲の心。三には智慧の心なり。はしめに清浄心といふは貪欲の煩惱を断するかゆへにこの心をおこすなり。およそ一切の七珍万寶めに【二五才】たち心につきぬ本一つき物、もしは飲食衣服車馬奴婢、若は金銀錢財苗木田宅乃至天上の五妙輪王の七寶かくのごとく、もしは端嚴の女人やさしくけたかき女御后乃至聖王の寶女、上界の天女をみても一念も汝かごとく欲心と云物をおこさざる也。是を清

淨心と名付。次に慈悲心といふは嗔恚の煩惱を断する故にこの心おこるなり。たとひ百千無量の敵人來て弓箭太刀長太刀もちて我を損害し、麤惡の詞をもて罵詈誶謗すとも、一念も腹の立心もなく、帰りては父母の一子を思ふよりもなをあはれみ思心のあるなり。これを慈悲と名付。三には智慧心と云は愚癡の煩惱を断するゆへにこの心をいたす。いはく十方世界にありとあるよき事悪きこと、もしは過て久しき事、もしは末に【二五ウ】あらんする事を掌の内をみるかごとくしるを智慧心とは申す」といふ。こゝに翁申さく「なを尋申へき事あり。極楽にまゐりてかたちもよく心もよくなり、種姓は忝なく佛の御子とならむうへは申に及はず。但世間の人をみるに、たとひ足もときよくして左右なき家高なれとも、その身貧しくなりぬれば、世になき人と名付てあれともなきかごとくにて、中々上臈の貧窮なるはなにゝもおとりたるなり。しかるを、極楽にまゐりたらむ時、種姓高貴にして佛の御子になりたりとも、その身貧しくして寶とほしくは、一の遺恨なるへし。その故は、此世にて上臈のもとへまいるにも物をもちてまゐりたるにこそそのきゝも侍れ、中にも神佛の御前にも花香御みあかしうちまきなどを持ってまゐりたるこそ利生も蒙り【二六オ】ぬとはおほゆれ。さやうに極楽にまゐりても、阿弥陀佛になにゝてももちてまゐりて供養したてまつりたらむこそ、めんほくもあるへき事なれ。しからは、極楽にて尋えましくは、この世にて作物の初ほの粟ひゑての物をも取置てまゐらむ時、これをこそ娑婆のつとゝ申て、御佛や観音勢至にも供養したてまつり侍らんはいかゝあらん」と申せば、僧云く「當時あらん作物の初最をは、この世

にまします堂塔佛に供養したてまつるへし。これは最上の功德にてまさしき極楽へまいるたねとなるなり。さて往生の時はおつらはしくこれらもたされとも、かの國にむまれぬれば、自然に大福長者はなるなり。これにて、佛を供養せんとも衆生にほとこさんと、心に任たる也。但その長者となるといふは、この世の人のことく【二六ウ】その身をくるしめなやまし、東西にわしりもとめて寶をうるにあらず。およそ彼の土の人の自然の福力といふはけしき言語道断なり。凡夫の心もことはおよはざる事也。凡彼國の寶をうるに七のゆへあり。一には内寶。二には外寶。三には雨寶。四には涌寶。五には變寶。六には淨寶。七には法寶。一に内寶といふは、かの土の人は時によりてたからの用なるには、みつからわつかにその一手をひらき一足をあげ一光を放ち一毛をのふるに、その中より無量の珍寶を出すか、飲食衣服にてもあれ、もしくは金銀錢財にてもあれ、若は良葉座具にてもあれ、奴婢六畜にてもあれ、惣して一切の寶といふ物をその身の内よりいたすをは内寶と名付。二には外寶といふは彼土の人は淨土にある【二七オ】時は、十方の聖衆晝夜に來りて種々の珍寶を供養し、若は穢土に出ぬれば三界の衆生の朝夕おもむきてめんくの供養をほとこし申、かくのことく身の内よりいたすのみにあらず、外より人の寶をほとこすをは外寶と名付。三に雨寶といふはかの土の人はわつかに一印をむすひ一呪を誦し一定に入一意をなすに、國土の中より無量の珍寶をふらす。これを雨寶と名付。四に涌寶といふは空よりふらすかごとく、又地よりたからをいたすをは涌寶と名付。五に變寶といふは地の下より別に寶を涌すのみにあらず、すなはちか

の十方三千大千世界の須弥鐵門等の大小のよろ／＼の山ならひに大地および草木瓦礫を皆變して、金銀等の種々の珍寶十方一切の國土の大海江河【二七ウ】の諸水等を甘露乳蘇および百味の飲食等になすをは變寶となつく。六に淨寶といふはとんよくのなき心をいふなり。凡夫の行者の欲心のすくなきをたに佛は第一の福人とのたまへり。いはんやかの土の人はせん分欲心なきをや。又ある聖教をみれば、たとひたからゆたかなる福人なりとも、欲ふかくしてあく期なきをは、これを貧人と名付、寶乏しき貧人なれとも、欲心あさくしてあなかになげかぬをはこれを福人と名付といへり。いはんや、かの土の人たからゆたかにして、しかも欲心なからむをや。七に法寶といふは此八万四千の功德法もなり。これを法寶となつく。又は聖財ともなつく。一切の諸財中の第一の最上の寶なり。しかれば或聖教に云、金銀等の七寶を三千大千世界につみ【二八オ】たらんたかさ須弥山はかりありとも、經の文字の一にはかはへからすといへり。しかれば、昔のさとりかしこき智者といふは、この法文のまことのたからとてこそおほく命をもすてしか。しかるを極樂にまいりぬる人はかくのごとくの無量無邊のもろ／＼のくとかほんもんを身命をすてゝもとめされとも、身の中の心の底におさめもちて一も不足なる事なし。およそかくのごとく、七しなの寶は盜賊のあやふみもなく、水火の恐もなし。おさむへき庫藏も入らず。守るへき兵士もいらす。とれとも盡す。久しくなれとも朽もせず。かくのごとくのたからにあきみちたらむうへは、なにの不足かあるへき。翁問云「ことに不審なる事侍り。これはなによりも大事のことなれば一番に申へかりつるを、と

かくまきてたゞいま思いたして申なり。【二八ウ】抑極樂の人は年よりて病をうけ死ると申事は侍らぬか。およそこの世の人をみるに、いかに力つよけれともこの三の敵にはにけえす。そうして人の身のむまるゝと申て、母のほらより出たる時、いふにかひなげなる姿にて心もわひしきにやなくをさきとせり。人たつことすれば程なく年のよるとてかやうにありかひもなき身になりはてぬ。又それをそれと思て候へは、病といひてたへかたく術なき事時々身にいてきぬ。わひし／＼なからもなからへてあれば、又しぬるといひてあとかたもなく失はてぬ。およそしかれば一人にかきらす、いかゞ果報目出人も死ぬるといふ事いてきぬれば、万事けふさめて日比のたのしみもそのあちはひたかひて、一期の榮花はたゞ片時の夢にこそみえ候へ。しかれば、極樂の人も此【二九オ】難をはなれざらんには、一旦いかなるたのしみありとも惣して浦山敷も侍らぬは」と申せば、僧答云「抑汝は前／＼もかやうの事をくはしく智者にあひたつね、よく／＼ならひたりけるかと覚ゆるなり。およそいひといふ事のごとはこそきたなくみつれなけれとも、そのおもむきみな聖教の道理に相叶て一もあたなる事なし。中にもたゞいまの尋やう殊神妙なり。汝心をしつめてきけ。およそ人の身に無量のくるしみありといへとも、生老病死の四のくるしみをいてす。この四の苦をせんして生苦死苦の二種の苦につゝめて、我らか身をは生死の凡夫と申すなり。およそ一切の苦は生死の二苦にこそもれりと、老病等の余の一切の苦は生の後死の前にあれるなり。抑かの國を極樂と名付る事は何【二九ウ】故そと尋れば、まことには此生死をはなれたる所なるかゆへなり。尺迦如來の一代

の聖教にも専極樂をすゝめ、弥陀如來の四十八願にも往生をちかひ給事はたゞひとへに我らかためなり。それと申は、生死をたすけんかゆへなり。およそ八万寶藏教戒のおもむき一切衆生をしてこの生死をいでよとなり。三世の諸仏の發心の源自他平等に生死をはなれたためなり。これにて、昔悉達太子と申し人、道心をおこさせ給しに、王宮をいでんとせさせ給しかは、父の淨飯王あなちになきてとゞめ申させ給しかは、太子御返事に申給やう『我に三のうれへあり。その中にせめては一なりともやめて給はらは、われ王宮をいて侍らし。その愁と申は愈老病これなり』と。こゝに父の王これをきゝて『我一天四海のぬし【三十才】として、万事に自在をえたれとも、この事におきては一も叶へからず』との給しかは、太子つゝに王宮を出給にき。この太子と申は、いまの尺迦如來これなり。抑極樂の人はいかなればかゝる大事の苦患ともをはまぬかれたるそといふに、彼阿弥陀佛の本願力によりて、蓮花より化生すれば、生苦もなし。常にわかくして不老の身なれば老苦もなし。妙法の良藥多ければ病苦もなし。常住不滅の身なれば死苦もなし。思ふ物にはなれされは、別をかなしむ苦もなし。堅固不壞の身なれば、物のおそろしく身のあやうきかなししもなし。万物自在なれば、貧しくともしき苦もなし。慈悲をそなへて外に怨敵なれば、人のうらめしくねたましき苦もなし。しかのみならず、天上に生をうる【三十才】事なければ、五衰のかなしみをはなれ、あくしゆの名をたにかす。されは、三途の恐ののかれたり。およそかの國の安樂なる事、無量無邊にして佛の弁説もおよび給はずといへとも、最略を案するに四種のたのしみあり。

その四種といふは、一には一切の苦をはなれしむるたのしみ、二には他をして一切の苦をはなれたるたのしみ、三にはみつから無量の樂をうるたのしみ、四には他をして無量の樂をうけしむるたのしみなり。汝何事にふけりてか、かくのこときの安樂の事を願はざらんや。こゝに翁又申さく「不審なる事一侍り。かゝる目出き極樂へまいるには、かちよりまいり候か、舟よりまいり候か。この土の人のとをく行には、もてのほかにわつらはしく、旅の具足入なり。中にも熊野みたけへまいるには、しやうゑはらへていの【三一才】物ゆゝしくおほく入なり。しかれば、極樂へまいらんにもこれいの物よいういすへきにや。この事又いかん」。僧いはく「極樂へまいるには、われとてたゞねともこの命おはる時、かの阿弥陀佛歎音勢至無量の菩薩聖衆を引くして來りてむかへ給。かるかゆへに、ゆめ／＼わつらはしき事なし。かの來迎の儀式をきけば、阿弥陀佛は光明をはなちて行者をてらし給へは、その身にありとある罪業苦痛こと／＼くうせぬ。その時觀音勢至まつ觀音金蓮臺をかたふけよせ給へは、勢至かうへをなてゝこれにのす。すなはち仏のうしろ聖衆の中にして、無量の菩薩伎樂哥詠をしらへ、讚嘆隨喜して極樂へ歸給なり。いま世間に迎摂といふはかれをまなへるなり」。こゝに翁申さく「此事こそあまり事にて帰てまことゝもおほえ侍ら【三一才】ね。そのゆへいかんとなれば、これ程つたなき身をもてさしもめてたき極樂へまいらむ事たにありかたはおほゆるに、あまさへかの佛のみつから來迎し給はん事かつうはおそれある方も侍れば、この事いかゝ心うへき。おなし凡夫としてたにも下さまの物をよふには、いつかはみつから行事あ

る。いはんや王の民をめすには我とむかふへしや。いかにいはんや、かの佛は王の果報に過れ給へる事、さきに十てんのたとへにきこえぬ。中く一口に申も過あり。しかるをかるくしくせめては御弟子たちをはつかはさて、みつから來給事大きに不審なり。いかん。僧云佛の我がことくの物をもしやしみ給はず、來りてむかへ給に、二のゆへあり。一には一切衆生その果報こそつたなけれども、みなことく佛性といひて仏になる【三二才】へきたねをそなへたり。佛はあきらかにこの事をしり給へるゆへに、そうして心ある物をかるしめ給事なし。たとへはいやしき女人なれども、王の子をはらみたりとしりぬる人は、是をあなつる事なし。二には佛の御心は慈悲をもて本とせるゆへに、衆生をあはれむよりほかに又他念なし。このゆへに、むかし發心して我國に生まれんと思はん物を來迎せずは、佛にならしといふ誓言をして願をおこし給へるなり。たとへは、人の最愛の一子のけはしき獸におはれてくる程に、すてに井の底におち入んとす。こゝに、その父母やすき心ありて、いかゝなかしくしく人をつかはしてこれをいたきとらしめんや。そのやうに我ら無常の獸におはれて、三惡の井のはたにのそめり。如來の大慈悲の父母これのみた【三二才】まひて、みつから來給はんはこれことほりなるをや。抑汝つらく思へ。たとへは、汝もしふかき罪科をしたるによりて、人來てすてにからめとりて獄定し頭をきらむとせん時は、たとひなんちにしたての物なりとも來て、かた人となりうはひとりて、この難をたすけたらんは、いか程かはうれしからむ。ましてとくい主人などのかひくしく來りてたすけたらんをや。況領家政所などのわ

か所領の民なりとて、みつからきたりてかた人したまはんをや。いかにいはむや、又まさしく帝王の身として、十善の玉躰のたしけなくみつからきたりて迎とりて、しかも皇子とさため、つるに王の位を譲らんとおもひやれ、けんいたゝいま、てき人のてにかゝり、獄定せられて頭をきられんとしつる心に、帝王の迎に【三三才】あつかりて、王宮にかしつかれ、ついに王位を継へしと思はん心、いかはかりの面目そや。まつかつく來給はんそのけいきをみん時、涙に目もくれ心もまとひ、おき所あるへからず。ゆへいかんとなれば、百官烈を引て前後にしたかひて、万乘市をなして遠近にのしり、隨兵甲冑をよろひきひしく陣をかため、官人弓箭をたいして頻に雜人をはらい、雜色前をおうて雷電の響をなし、隨身馬をあけて耳目をおとろかし、およそ月卿雲客のよそおい花を折てかさり、駟馬寶車のたくひ、玉をみかき冠をたくしくしてやうやくちかつく。これらの儀式よそにてみるたに身の毛もよたつ程にめてたくこそおほゆれ。況、汝わか苦難をたすけに來給そかしと思はんをや。しかのみならず、われら【三三才】十惡五逆の罪科ふかきによりて、閻魔王のつかひにからめられて、すてに八寒八熱の禁獄におよはんとす。こゝにかの阿彌陀佛の法王、三乘聖衆の百官を引くして、たすけ導引に來給はん御ありさま、かねて思やるへし。いかはかりの心ちかせん。ゆへいかんとすれば、護念増上の冥衆、十方にみちて魔生をふせく。隨兵の守護よりもたのもしく、尺梵護世の諸天虚空にみちて妙花をふらす。万乘ののしるよりもなゝめなり。二乗四果の雲客前後にしたかひて次第をみたらす。三賢十聖の月卿左右につらなて儀式おは候すとい

ふ事なし。およそ伎樂哥詠の音曲は雑色の藝躰にもすくれ、諸天童子先陣すれば、隨身の參馳よりもまされり。その中に觀音勢至の左右の大臣金蓮臺ののり物【三四才】を寄て、汝等をのせて刹那に極樂へ歸て補處の皇子とさためられ、ついに成佛の王位に昇らむ事、歡喜たとへをとるへき物なし」。こゝに翁申さく、「まことに佛に大慈悲ましますとしりなは、來迎の不審はあるへからず。いはんや、おもき本誓ならむをや。たゞし、なを不審なる事侍り。たとひ極樂にまいりて無量の樂にはこるとも、たゞわれ一人はかりその樂をうけて、むかしさりがたく思し父母兄弟妻子眷屬の、三惡道にありて苦をうけんをみきかんに、なんのやすき心かあるへき。我ら凡夫の慈悲もなきたにも、恩愛おもふ心は切なり。山海の珍物をくうとも妻子の飢たらんを見ては、なんのあちはひかあらんや。綾羅錦繡をきたりとも父母のはたかなるをみは、なにの悦かあらん。これにて、説法の【三四才】聴聞をせしかは、導師のかたり給しは、昔米百年とかや申ける物、冬の夜人のもとにとゞまりたりけるに心ならずねたりけるに、あるし心ならず衣をきせたりけるに、米百年おとろきて、『我母のさむかりつらんに我身しはらくもあたゝかなりけん、かなしきよ』とて、にはかにぬきすてゝなきかなしみけり。しかのみならず、母か尸にもなれしとて塚のほとりにいほりをむすひ父の行來を尋て、ふかき淵に身をなけし物も侍りき。いはんや、おやの子を思ならひ、またく我身のたのしみをさきとせず。いはんや、かの土の人はこの土の人よりも廣大慈悲をそなへて侍らんに、いかゞ我身のたのしみはかりにほこりて他人のうれへをしらさらむ事、これ又いかん。僧いはく、「こ

の事は前におろく申つるとおほゆれとも、かさねてとはるゝことなれば猶くあきらかに申へし。【三五才】抑往生をねかふ本意たゞ恩愛引導の爲なり。極樂の人の所作はひとへに衆生りやくのいとなみなり。あやまて人をたすけんとも思はて、我身のたのしからん事はかりを思て、往生をねかふはむまれずといへる聖教もあるなり。しかるを、汝他をわたさんと思心をおこす事、第一に神妙なり。しかれば、汝極樂へたにまいりなは、さきに別てかなしみし恩愛いままでざりかたく思きやうかい、めんくさまくしたすけみちひきて、ともに宮殿の内にすみ、おなしく蓮花のうへに座して、たかひにむかしの事をかたていはく、おもひきや昔別の涙にむせひて六種の生處しりかたき事をかなしみし心に、いま再會の多みをひらきて一佛淨土剩にさたまる事を悦へしとは。はかりきや、いにしへなんちを山野におくりてひとり亡室に歸てなげきおもひし心に【三五才】いま淨土にむかへてともに不退に住してたのしみへしとは。あるひは中央の宮殿にみちひきては、ともに見佛聞法の利益をさつけ、あるひは四邊階道にいさなひてはおなしく糸竹管弦のあそびをはしめ、あるひは七重寶樹の本にいたりてはおのゝ閻浮の同行の友とあそひ、あるひは八功德池に望てはたかひに各留半座の蓮にたはふれ、しかのみならず、地前地上の菩薩をみればみなこれ生々の恩愛の境界なり。有学無学の聲聞をみれば、一人も世々の親類骨肉ならざるはなし。かくのことくの廣劫有縁の人々に、たとひあひみて後になかく二たひはなるゝ事なからむ。あに生々世々にあらすや。抑いかなればかの土の人の他を道引にやすく心にまかせたるそやと云。それ六種の藝能あるゆへ

なり。十方をみるに眼くもり【三六才】なければこれらか生處をみる。耳にさはりなければ物いふこゑをき、十方にいたるに是にと、こほりなければかの所へいたる。その心をする事あきらかなれば、ねかひにしたかひて方便をまうけ、その法をたく事自在なれば、機にしたかひてかいこせしむ。淨妙無為の身なれば、焦熱無間のほのおに入て化すれとも火にもやけす。自在神通の力なれば、八寒紅蓮の水をわりてたすくるにさはりなし。いはんや、人中天上の化導たな心をさして速疾なり。汝恩愛をあはれむ心あらんに付てもことに極樂を願へし」と。翁申さく「此身は下臈にて候へともことにこの心かふかく侍り。しかれとも、是ちからなきにてはてにはみなをくれにき。しかれ一期に思ひ出ひとつもなくしてはてにはみなをくれにき。しかれは、それにつけてもとくして極樂に【三六ウ】まいりて、その本意をとけ候はやと存候。た、しそれにとりて又不審なる事侍り。極樂へまいるにわたくしのはけみにはあらず。かの佛の御迎にあつかりてやすくとまいるとはすてにうけ給ぬ。抑いかなる物のかの御迎にはあつかり候そや。もし又死ぬる物はみなおなしくかの御迎にあつかると思はは、なにのゆへに六道所く、にわかれて方くへゆく物はおほく侍へきそ。しかもその中にかの佛の御迎にあつかる物はいかさまにもやうひとつあるへしとおほゆるなり。およそ人間の人をみるにその劫をいれて後、その益をうるなり。主君の御徳を蒙る物は宮仕をしてのうへなり。神明の利生をかうふる事は劫をいたして後の事也。しかれば、いかなる奉公を致してか來迎の御恩にあつかり、いかなる忠を盡してか往生の昇殿をはゆるさるへき。この事こまか

にはからいおしへ給へ」といへ【三七才】は、この聖涙をなかにて隨喜していはく「汝まことにた、物にあらす。おそらくはこれ佛菩薩の化現か。およそ上よりのかた尋とへる事とも、ことはこそいやしけれとも心はひとつもあたなる事なし。中にもた、いまの尋やう、まめやかにありかたし。誠に上にあかすかことく、いかに淨土のたのしき事をき、たりとも、かしこくまいるやうをしらざらんには、いたつらに隣の寶をかそへたるかことく、みつからはその益ひとつもなかるへし。汝しらんと思は、我そのやうをおしへん。心をしつめてきくへし。そのやうといふは、前の事にあらす。汝かいふかことく、來迎の恩徳を蒙る事は功徳のこうをいたしたてまつる、往生の昇殿をゆるさるく、事は善根の宮仕をしての儀也。およそ善を行する物はよき所に生まれ、悪をおかす物は惡道におつる【三七ウ】事は、これ因果の道理といひて、ちからおよはず。すこしもへんはなき事なり。こゝにこの翁、涙をなかしかなしみて申さく「君はわかとひたてまつる事をき、て隨喜の涙をなかせ給といへとも、我は君の答給事をき、て後悔の涙をなかず。ゆへいかにとすれば、すてに善を行する物はよき所に生まれ、悪をおかす物はあく道におつると候へは、しからは我身はた、地獄をのみすみかとして、極樂といふ事はおもひもよるましかりけり。そのゆへいかにとなれば、いまにわかにか一期の所行をおもひつゝ、くるに、た、いたつらに罪をのみつくりて、くともといふ事はひとつもつくる事なし。財寶をもたされは堂塔をもたてず。身命たにつきかたければ乞食をたにむなしくかへす。世路にいとまなければ佛の御前へまいる事もなし。文字にくらければ經【三

【八才】巻をよめる事もなし。さて又罪といふつみは、ひとつとしてつくり残したるはなし。心とこそろさゝれとも、田嶋を伴にはおほく虫の命もころす。便宜あらはぬすみもしつへし。そら事もつかまつる心には腹のたち物のほしき事ひまもなし。これといの事もみな罪なりとこそ説法にはせられ候しか。しかれば、かゝらむ物はいかにかとしてか、かの極楽へはおほけなくまいり候はんとも思ふるへき。かなしきかなや、生涯いたつらにくらして一善もたくわへたる事なし。獄卒たちまちに來なは、なに^々かたてにすへき。あはれなるかなや。聖衆の迎にあつかりつゝ、觀音の蓮臺にのりて安樂のさかひにまいりはつしこそせめ。あまさへ極卒のてにかゝりて猛火の鐵車にのり、無間のそこへいらんことよ。たとひけふより【三八ウ】後、善を修すといふともいまいくはくの功をかつまん。しらす、けふもや一期の終ならん。たとひふしきに命なからふとも、又何事をおとめん。わかかりし時たにもかなはず。いはんや老て後をや」といひて、足すりをしてなき歎く。僧もおなじく涙をなかけていはく「汝なげく事なかれ。かなしむ事なかれ。我が佛の御迎にあつかりて、やすくとかの國にむまるゝ事、相違なきひとつのしたくをしれり。そのしたくといふは一紙半殘も物の入にはあらず。一文一義をならひよむ事にもあらず。たゝ心ひとつとはひとつそいる。その心ひとつといふは前の心にあらず。たゝ眞実往生を遂はやとねかふ心なり。しかるをその心は汝かいふかことくならは不足あるへからず。次にそのことはいふはことなることはにあらず。この神子殿の暁いまいおそれ【三九才】つる南無阿彌佛と申言葉なり。しかればまめや

かに往生のしたくおもひて口につねに南無阿彌佛と申すか、たしかにかの國に生るゝ第一のしたくにて侍るなり。たゝしこのしたくは凡夫のはからひにもあらず。わか今案にてもなし。かの佛の汝かことく一切の罪をのみ作て一切の功德にたらず、生死盡る期なく佛道にたてをつける輩をあはれみて、たすけすくはんかためにしたくし給へる御したくなり。これをたくみはしめ給し事のおこり、いかにといふに、かの佛のむかし凡夫にてほうさう比丘といはれてまじくし時世、自在王佛と申せし仏の御前にて四十八品の誓願をたて給き。せいくわんといふはちかふ事なり。その第十八番にあたての御誓願にはく、十方の衆生我國に生まれん【三九ウ】と思て我名を十たひとへんに、もしむまれすは我佛にならしとなり。さて、そのゝちかの法蔵比丘ついに佛になり給へり。いまかの阿彌佛と申はこれなり。此故に南無阿彌佛となふる物は、かの佛の昔の誓願に相叶ゆへに決定して極樂にむまるゝ因縁なり。しかれば、もし我らかの仏の名号を唱とも往生すまじきならば、なんの故にかかの法蔵比丘佛になり給へき。しかるを、いますてに佛になり給へるをもて、その佛の名号を唱へんにおきては決定して往生すへしといふ事をこの道理かけんせんたるによて、念仏する物は往生を決定する物なり。この故に汝かことくなる、いふにかひなき物の中にも、たゝ念佛はかり申て目出したるためし、天竺晨旦日本の傳記にするしをきたる事かそへつくすへから【四十才】す。しかれば、汝も往生ねかほしくおほえは、かのあとをつきていそぎ眞實心に念佛を行せよ。たゝし法蔵比丘はなんの故に一切の功德そのかすおほき中に念仏の一行をもて、

別に十八の願にはたて給へるそといふに、この不審を聖教にあらきらめきたむるやうは、念佛には二のゆへあるによりて別して念仏を本願とたて給へるなり。その二のゆへと申は、一にはやすきゆへ、二にはすくれたるゆへなり。はしめにやすきゆへといふは、念佛は一切のもろくの行の中に第一に行しやすき行なり。余行きやうしかたき行なり。これにて若堂塔をもて本願とせば、汝かごとく寶乏しくして身命をたに継かたき物はもれぬへし。もし経巻よむをもて本願とせば、汝かごとく文字にくらくして一文不通の物はそちかひに【四十ウ】もれなん。若智者をのみむかへんとちかひ給は、汝かごとくの愚人はもれぬへし。しかるをいまこの第十八の願の心は、有智無智善人悪人をもゑらはす。道俗男女貴賤上下をももらさす。平等に往生を遂しめんかため、万行の中に行しやすきやうをゑらひて本願をいひ給へり。仏の廣大慈悲は是をもて心うへし。次にすぐれたるゆへにといふは、聖教にあかせる事あけてつくすへからす。しはらく一のとへをもて申さは、家といふことは中には棟梁椽柱等の一切の家の具をこめたり。棟梁椽柱等の一々のこととはの中には、よの一切のやくをおさめたる事なきかごとく、南無阿弥陀佛といふ詞の中には、阿弥陀佛の御身にありとある功德みなこもれり。ひとつもかけたる事なし。余の功德はしらすといへり。凡此念仏の功德、経【四一才】論聖教にほめたる事、年月をふともいかく申つくさん。略して大概を申さは、それ念仏三昧といは、一こゑに無量の罪障を滅して極樂に往生す。悪業ふかくとも卑下すへからす。一念に無量の無上の功德を具す。善根あさくともふそくあらし。そのことはわつかに六字な

るによりて文字にくらき人も唱へつへし。この法は佛の御名なるによりてきりをしらざれともくるしみにあらず。万行の中に最上の行なれとも修行するにわつらひなし。説法のなかに第一の寶なれとも盜賊の恐なし。道俗男女をきはされは在家なれはといふへからす。行住坐臥をゑらはす。威儀をしらすとも歎へからす。時所を論せされは、安置内外にてもれを唱へ誦經をいはされは世路のそうくにもさはりにあらず。數反の功をつめとも所もつひへす。運心年久しけれとも盡る事なし。しかれば、【四二ウ】汝さきに七十の年序をいたつらに過たる事をかなしむといへとも、いま一念の功德まことにもれざる事を悦へし。はしめには閻魔の使たちまちに來らん事を恐といへとも、かへて聖衆の迎すみやかに來らん事を悦へし。しかれば、汝等まことに往生ねかしくおほえは、今夕よりして命終らんをかきりにて、翁は木を切らむにも斧をくたさんたひに南無阿弥陀佛と唱へ、家に帰らんにも足をあけんたひに南無阿弥陀佛と唱へよ。うは、衣を織らんにもはたのこゑにつけて南無阿弥陀佛となふへし。いはんや、よみのまにいたつらならん時ともに聲を合てこれをとなへよ。暁のね覚のしつかならんにもおなしく心をすましてこれを念せよ。これを往生極樂のいてたち、聖衆來迎の御まうけにした【四三才】まふへし。さてそのひまには、紙佛一鉢まうけたてまつりて西の壁にかけつ、いたつらに野山におほき花をありきのたひに手折つ、朝夕たてまつり、いさ、かもくひ物のはつ物をはまつ仏に供養し、峯の木の実をひろはんにも澤のわかなをつまんにもかならず佛に手向よ。これ又最上の往生の程なり。さて仏の御前にまいらんとたひには合掌しておかみたてまつりつ、本願あやまち給は

す、臨終にはかならず迎給へと申へし」と。こゝに、おきなと
うはとゝもに、涙にむせひてふしまろひ、まつ、うはゝ念佛を
いまひ恐つる事をかなしみ、翁はいま稱名をたもつ事を悦、こゝ
に聖、手をうちて十念さつけはしむ。二人掌を合てとなへ終ぬ。
さてしもあるへきならねは聖帰ぬ。二人は彼教へをたかへす、
【四二ウ】それより後は、ねふる時はしらす目のあきたる程は、
いつる息入いきはたゝ念佛にてそありける。かくて三年と申す
神無月十日あまりの比、すこしなやみつゝ二人なから一度にね
ふるかごとくして息絶ぬ。いほりのうち異香薫して音楽空に奏
す。末代にはためしすくなき事ともなり。この隣の女涙をなか
し、後のわさねん比にして、尼になりて一向に念佛してそ侍り
ける。こゝに慈巧上人ありしあたりゆかしくて、かのいほりの
前をすくると尋給へは、隣の尼行あひて事のありさまをかた
り涙をそなかしける。ひしりもおおしく墨染の袖をそしほり給
ける。さてこの尼二心なく念仏してねかひのことく往生素懷を
そとける。【四三才】本云、鳴瀧殿の御本にてうつしおはりぬ。

此本は後崇光院御筆。永享元年十月七日【四三ウ】

(こいだ ともこ・慶應義塾大学大学院生)